立山町文化財調査報告書第16冊

立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅷ

１９９２年度

立　山　町　教　育　委　員　会
富山大学人文学部考古学研究室
１９９３年３月

立山町文化財調査報告書第16冊

立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅷ

１９９２年度

立　山　町　教　育　委　員　会
富山大学人文学部考古学研究室
１９９３年３月

序

霊峰立山の山麓に広がる立山町は，古くより人々の生活の場として，また立山禅定に代表される振興の場として，数多くの文化遺産を育み守ってきた所です。

ところが，近年，押し寄せる開発の波の中で，これらの貴重な文化遺産は次々と破壊され、消滅の危機に瀕しています。

町ではこの事態を重視し，かつ文化財の保護を通して先人の文化を理解・伝承することが，真の地域社会の発展へとつながるものであるとする観点から，昭和60年から埋蔵文化財分布調査を実施し，文化財保護のための基礎資料の充実に努めてきました。

今，８年間の地道な調査が実り町内全域の分布調査が完了して，調査前は50数遺跡が知られていたにすぎなかったものが一挙に140数遺跡と増加し，町域の時代にともなう開発状況の大筋も判明しつつあります。

この報告書がより多くの方々に利用され，文化財保護の一助となることを願ってやみません。

最後に，調査の実施及び報告書作成にあたり，御協力いただいた地元の方々，また御援助をいただいた富山県教育委員会，富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に，厚く御礼申し上げます。

平成５年３月

立山町教育委員会

教育長　金　川　正　盛

例　　言

1　本書は，立山町（たてやまちょう）教育委員会が国庫補助事業として実施している遺跡詳細分布調査の第8年度（1992年度）の報告書である。

2　調査にあたっては，富山県埋蔵文化財センターおよび富山大学考古学研究室の指導と協力を得て，後記の調査団を編成してこれを実施した。

3　遺物整理・実測・製図・写真撮影は，立山町教育委員会社会教育課三鍋秀典と富山大学考古学研究室の全員が協力して，おこなった。

4　本文は，宇野隆夫（富山大学人文学部助教授），前川要（富山大学人文学部助教授）三鍋秀典，大知正枝・小野木学・海道順子・榊原滋高・島崎久恵・中村大介・野川裕二・長谷川幸志・松田留美・松山温代・宮田明・柳沼弥生（富山大学人文学部考古学研究室学生）が分担して執筆した。執筆の分担は文末に記した。

5　参考文献は本文末に一括し，通し番号を付して示した。

6　遺物番号は図版毎に通し番号を付した。実測図版と写真図版の対照を図版下に示し実測図と写真の番号を統一している。

7　編集は宇野隆夫，前川要と三鍋秀典が協力し，校正は榊原滋高も加わっておこなった。

8　本書の作成にあたっては，調査団顧問の安田良栄氏をはじめとする多くの方々から貴重な御教示を受けた。深く感謝して御礼申し上げる。

目　　次

第１章　はじめに …… 1

1　調査の目的 …… 1
2　調査の経過 …… 1
3　立山町の地勢と自然環境 …… 2
4　1992年度調査地区の地勢と地区割 …… 4

第２章　分布調査の成果 …… 7

1　遺跡と採集遺物 …… 7

(1)　下田Ⅰ遺跡 …… 7
(2)　下田Ⅱ遺跡 …… 7
(3)　岩峅寺遺跡 …… 7
(4)　宮路遺跡 …… 8
(5)　東中野新Ⅰ遺跡 …… 8
(6)　東中野新Ⅱ遺跡 …… 9
(7)　横江中野林遺跡 …… 10
(8)　横江Ⅰ遺跡 …… 10
(9)　横江Ⅱ遺跡 …… 10
(10)　新宮山城跡 …… 12
(11)　池田城跡 …… 12
(12)　その他の採集遺物 …… 12

2　遺物の散布状態 …… 13

(1)　縄文時代遺物の散布状態 … 13
(2)　弥生・古墳時代遺物の散布状態 … 13
(3)　古代遺物の散布状態 …… 13
(4)　中世遺物の散布状態 …… 20
(5)　近世遺物の散布状態 …… 20
(6)　散布状態の小結 …… 20

第３章　８年間の分布調査を振り返って …… 22

参 考 文 献 …… 27

図 版 目 次

関連頁

図版 1　Ⅷ地区航空写真(1) …… 1991年撮影…… 1 ～ 4
図版 2　Ⅷ地区航空写真(2) …… 1991年撮影…… 1 ～ 4
図版 3　遺物実測図(1) …… 大知・小野木・海道・榊原・島崎・中村・野川・長谷川・…… 7 ～13
　　松田・松山・宮田・柳沼作成
図版 4　遺物実測図(2) …… 大知・小野木・海道・榊原・島崎・中村・野川・長谷川・…… 7 ～13
　　松田・松山・宮田・柳沼作成
図版 5　遺物写真(1) …… 三鍋・榊原撮影…… 7 ～13
図版 6　遺物写真(2) …… 三鍋・榊原撮影…… 7 ～13
図版 7　遺物写真(3) …… 三鍋・榊原撮影…… 7 ～13
図版 8　遺物写真(4) …… 三鍋・榊原撮影…… 7 ～13
図版 9　遺物写真(5) …… 三鍋・榊原撮影…… 7 ～13
図版10　遺物写真(6) …… 三鍋・榊原撮影…… 7 ～13
図版11　Ⅷ地区の遺跡と遺物採集地点Ⅰ …… 柳沼作成…… 7 ～13
図版12　Ⅷ地区の遺跡と遺物採集地点Ⅱ …… 柳沼作成…… 7 ～13
図版13　Ⅷ地区の遺跡と遺物採集地点Ⅲ …… 柳沼作成…… 7 ～13

挿 図 目 次

第 1 図　立山町の気候・植物帯の垂直変化 …… 『立山町史』から…… 2
第 2 図　立山町西部の地勢 …… 柳沼作成…… 3
第 3 図　Ⅷ地区図 …… 柳沼作成…… 5
第 4 図　Ⅷ地区の地区割 …… 柳沼作成…… 6
第 5 図　池田城縄張図 …… 前川・松原作成……11
第 6 図　新宮山城縄張図 …… 前川・松原作成……11
第 7 図　Ⅷ地区の地区名 …… 柳沼作成……14
第 8 図　Ⅷ地区縄文時代遺物の散布状態 …… 柳沼作成……15
第 9 図　Ⅷ地区弥生・古墳時代遺物の散布状態 …… 柳沼作成……16
第10図　Ⅷ地区古代遺物の散布状態 …… 柳沼作成……17
第11図　Ⅷ地区中世遺物の散布状態 …… 柳沼作成……18
第12図　Ⅷ地区近世遺物の散布状態 …… 柳沼作成……19

第1章　はじめに

1　調査の目的

立山町（たてやままち）が人の活動の舞台となったのは，現在知られている限りでは，今から約2万年前，吉峰台地においてである。以後，旧石器（先土器）・縄文時代は町東部及び東南部丘陵上，弥生時代は町北部のデルタ地帯，古墳時代以降は町中央部の扇状地というように，その生活の場は時代により変化してきているが，現在に至るまで連綿と人びとの営みが続いている。[1~9]

従って遺跡も多数存在しており，1972年（昭和47年）の『富山県遺跡地図』においては63個所の遺跡が登録されている。そして，その後発見された遺跡も多く，未発見・未登録の遺跡も少なからず存在するものと予想される。

また近年の開発行為の増加に伴い，遺跡の保護と開発の調整が社会問題化してきており，中には人知れぬまま消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような状況下において，埋蔵文化財の保護と活用のため，また保護と開発との調整のため，基礎資料としての遺跡台帳，遺跡地図の整備充実が急がれていたのである。

2　調査の経過

以上の理由により，立山町教育委員会では，国庫補助事業として遺跡詳細分布調査をおこなうことに決定した。

1985年（昭和60年）3月27日に，町教育委員会と富山大学考古学研究室との会合がもたれた。その結果，町教育委員会を中心とした調査団を編成し，元立山町史編纂主任岡崎卯一氏と町文化財保護審議委員安田良栄氏を顧問に迎え，富山大学考古学研究室の全面的な協力を得て実施することとなった。

調査の方針としては，町域の中でも遺跡分布密度の濃い，町東部・東南部丘陵地帯及び町北半部の扇端・デルタ地帯を対象地域とし，5個年計画とすること，年度ごとに報告書を作成し最終的には遺跡分布図・地名表，及び主要遺跡解説等を，含む報告書を刊行することが決定された。

その後，1989年（平成元年）に，町教育委員会と富山大学考古学研究室とで再度の会合がもたれ，町の平野部全体を対象地域に含め，調査を4年間延長して9個年計画で実施すること等が決定されたが，遺跡密度の関係から8個年で調査を完了することができた。

今年度の現地調査は，第Ⅷ地区について（第2図），1992年10月6日～11月6日までの間，計8日間，延120人余の参加を得て実施した。

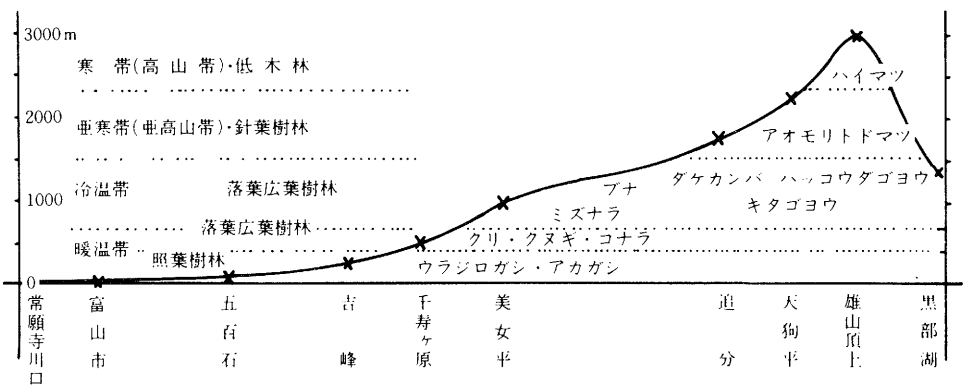
立山町埋蔵文化財分布調査団

団　　長　金川　正盛　立山町教育委員会教育長
顧　　問　安田　良栄　立山町文化財保護審議委員
調 査 員　宇野　隆夫　富山大学人文学部助教授
　　前川　　要　富山大学人文学部助教授
　　三鍋　秀典　立山町教育委員会社会教育課主事
調査補助員　片岡　英子，河合　君近，鈴木　和子，浜木さおり，宮沢　京子，森田知香子
　　角田　隆志，大知　正枝，大野　淳也，小野木　学，海道　順子，榊原　滋高
　　鳥崎　久恵，中村　大介，野川　裕二，長谷川幸志，松田　留美，松山　温代
　　宮田　　明，柳沼　弥生（以上　富山大学人文学部考古学研究室学生）
事 務 局　開上　　寛　立山町教育委員会社会教育課課長
　　佐伯　外宣　立山町教育委員会社会教育課庶務・文化振興係長
　　松井　君子　立山町教育委員会社会教育課主任
　　三鍋　秀典　立山町教育委員会社会教育課主事

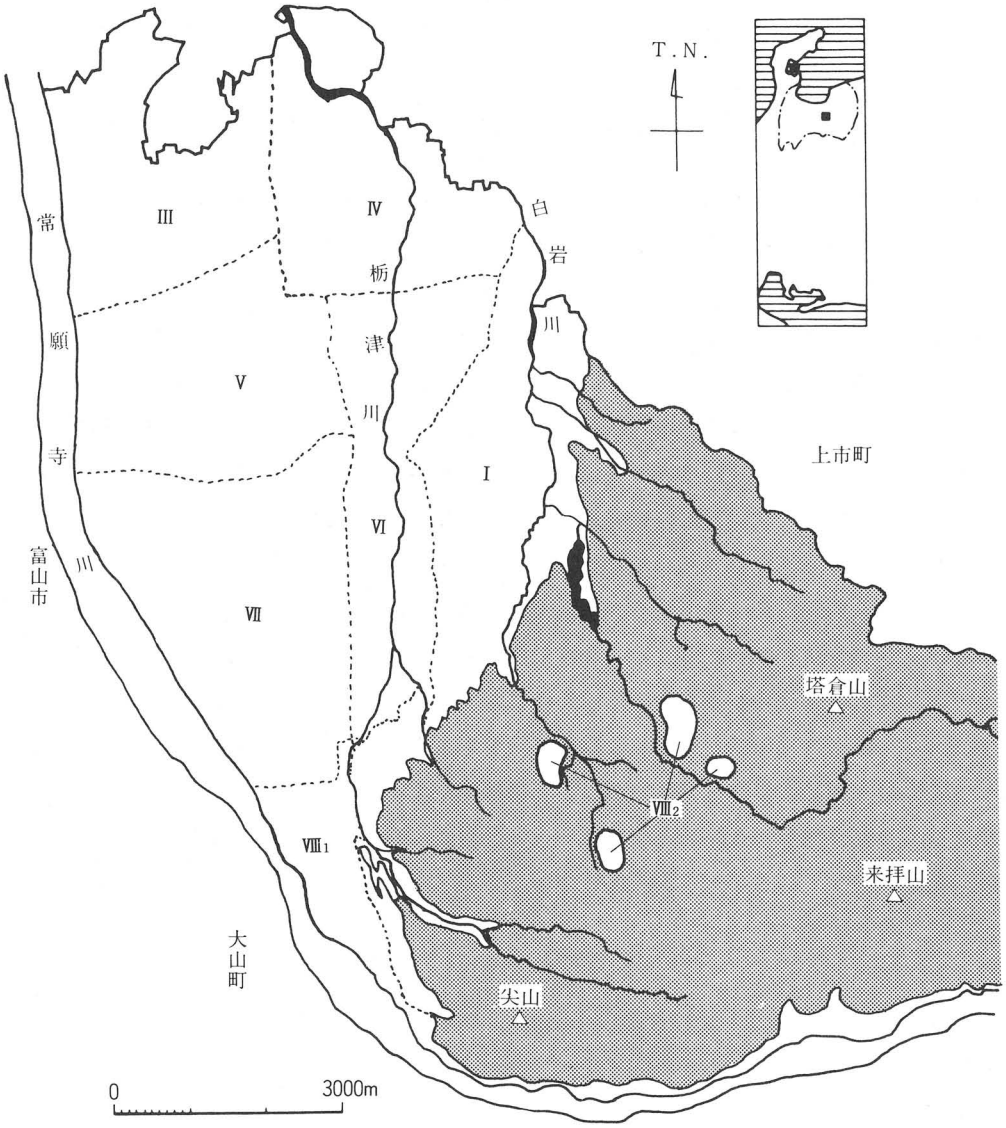
3　立山町の地勢と自然環境

立山町は富山県の東南に位置し，立山連峰に源を発する常願寺川に沿って，細長く延びた町である。西は県の中心である富山市に，東は後立山連峰で長野県と接し，東西約43km，南北約21km，面積308k㎡を測る。

地形的には実に変化に富んでいる。町の北西部には常願寺川と白岩川とによって形成された



第1図　立山町の気候・植物帯の垂直変化（『立山町史』から）



第２図　立山町西部の地勢

三角州（デルタ）地帯があり，その南には常願寺川の扇状地が広がっている。富山湾岸までの距離は約10kmを測る。この扇状地の東側には隆起によってできた河岸段丘が南北に延び，扇頂部の岩峅寺から上流の千寿ケ原にかけても常願寺川沿いに河岸段丘が広がる（第２図）。この河岸段丘の後背地には丘陵があり，さらに標高3,000ｍの山脈へと続く。これが立山連峰であり，ここには氷河地形の圏谷（カール）や，火山地形である熔岩台地やカルデラが見られる。立山連峰の東側は黒部川によって深くえぐられ，後立山連峰によって長野県に接する。

このように立山町は東西の比高差が大きいため，町域には照葉樹林帯，落葉樹林帯，針葉樹林帯，低木林帯という多様な植物帯が成育し，それに伴う複雑な動物相も存在する（第１図）。

4　1989年度調査地区の地勢と地区割

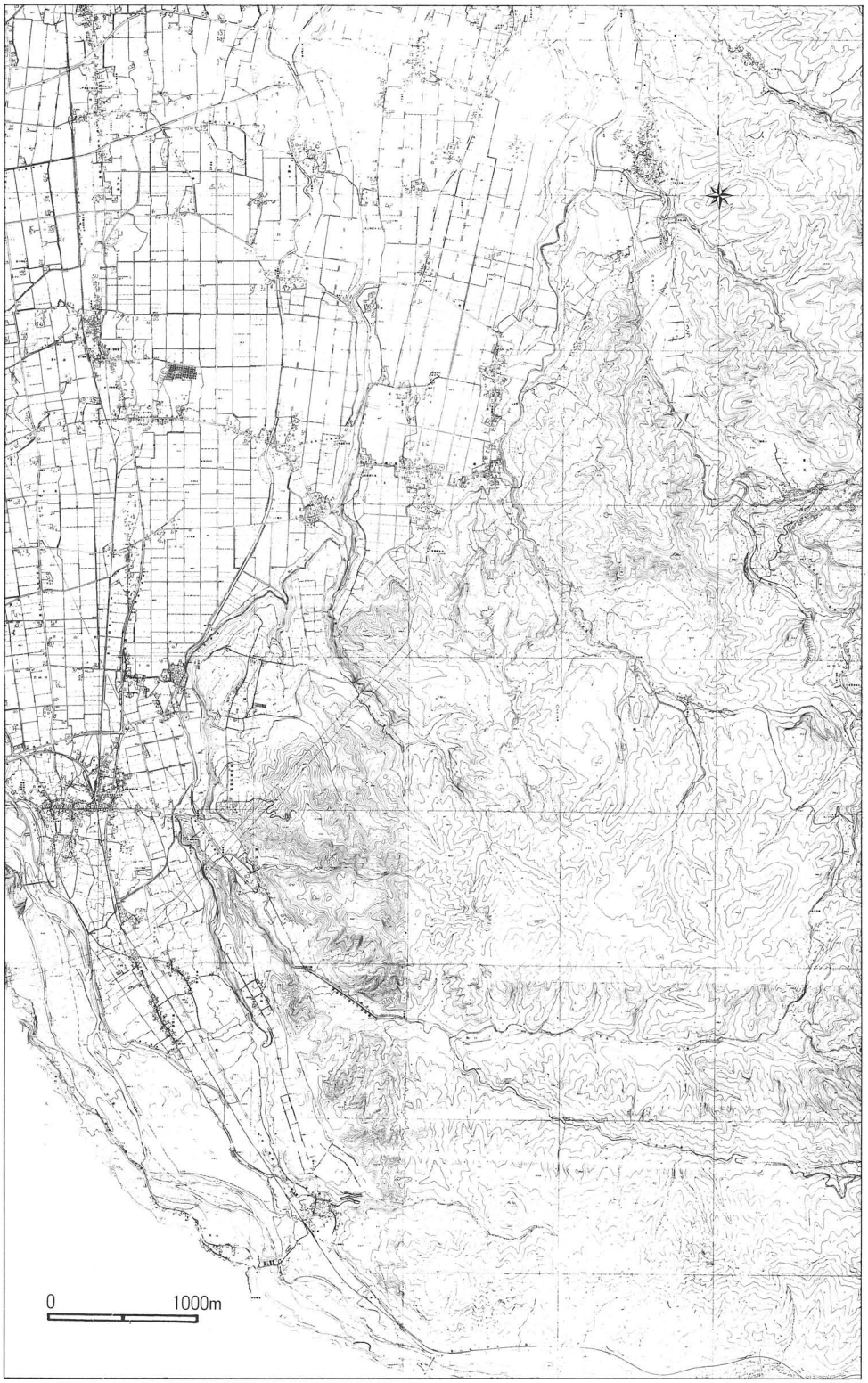
今回の調査地区は，町南部の常願寺川によって形成された河岸段丘から扇状地扇頂部にかけての一帯と，町東南部の山間部である。以上は，きわめて広範囲にわたっているため，２地区に分けて調査を実施した（第２図のⅧ１・Ⅷ２地区）。

Ⅷ１地区は，常願寺川によって形成された扇状地扇頂部から，その奥の低位河岸段丘にかけての地域である。従来この地区には，古代以前の遺跡としては，横江中野林遺跡が知られるのみであったが，今回の調査で８遺跡が新たに発見された。なお，当地区には「雄山神社前立社壇」があり，中世から近世にかけて立山参道として賑わった所で，立山信仰関連の遺跡が数多く見られる。現在は，調査地区のほとんど全てが宅地，または水田等の耕作地となっている。また，現在も立山観光の主要路であり，観光関連の開発が多い。

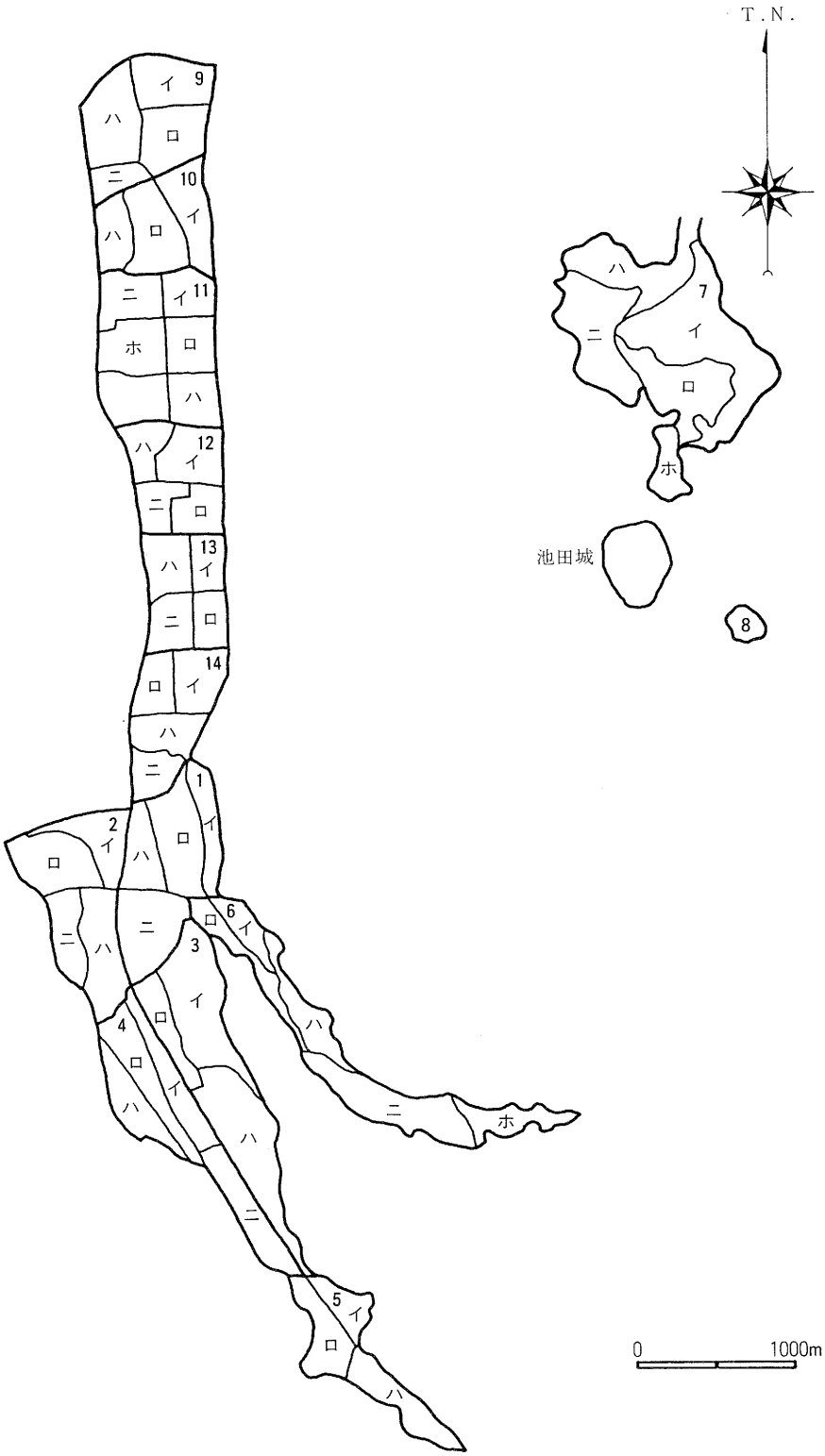
Ⅷ２地区は，山間部の小平坦地で，白岩川とその支流によって形成された河岸段丘がほとんどを占める。当地区も中世から近世にかけての立山参道にあたり，関連遺跡の松倉経塚からは享禄四年（1531）在銘の金銅製函形経筒の残欠が出土している。また，戦国時代には寺嶋氏の居城であった池田城の城下として繁栄した地域でもある。現在は過疎化が進んでおり，平坦地は宅地または水田等の耕作地であるが，多くは植林が進んで山林となっている。

調査は，全体を地形・水路・道路等によって14地区に大別し，さらに56の小地区に細別して実施した。

（三鍋　秀典）



第3図　Ⅷ地区図



第4図　Ⅷ地区の地区割

第２章　分布調査の成果

１　遺跡と採集遺物

(1)　下田（みさだ）Ⅰ遺跡（図版11の125）立山町下田

遺跡は，常願寺川右岸の高位段丘である吉峰の下方に位置し，東側を栃津川が流れる。標高は，約180ｍを測る。なお遺跡は現在主に水田として利用されている。

今回の調査で採集した遺物は，近世の土師器３片，白磁１片，越中瀬戸２片，須恵器１片，珠洲１片，縄文土器１片，不明陶器１片である。これらのうち２点を図示した（図版３の１・２）。

図版３の１は，白磁の壺である。口縁部は残っていない。内面に回転撫で調整がされており，胎土は密である。

２は，縄文土器の浅鉢であり，口径は11㎝前後を測る。口縁より５㎜程下に５㎜程の沈線が入る。　（島崎　久恵）

(2)　下田（みさだ）Ⅱ遺跡（図版11の126）立山町下田

遺跡は，常願寺川右岸の高位段丘である吉峰の下方に位置し，東側を栃津川が流れる。標高は，約180ｍ～182ｍを測り，規模は東西150ｍ，南北100ｍ程と推定する。なお遺跡は現在主に水田として利用されている。

今回の調査で採集した遺物は，越中瀬戸４片，縄文土器１片である。これらのうち２点を図示した（図版３の３・４）。

図版３の３は，越中瀬戸匣鉢の口縁部破片であり，復原口径は約16㎝を測る。内外面に轆轤回転撫で調整を施す。内外面とも褐色に発色するうすい鉄釉を施す。胎土に砂粒を微量含む。

４は，越中瀬戸匣鉢の口縁部破片であり，復原口径は約12㎝を測る。内外面とも，茶色に発する鉄釉を施す。胎土は精緻である。　（大知　正枝）

(3)　岩峅寺（いわくらじ）遺跡（図版11の127）立山町岩峅寺

遺跡は，常願寺川の右岸，富山地方鉄道上滝線岩峅寺駅の西側に位置する。雄山神社前立社壇を含む東西約400ｍ南北約275ｍの範囲に及び，標高は約185ｍを測るものと推定する。なお遺跡は現在主に水田，あるいは住宅地として利用されている。

今回の調査で採集した遺物は，幕末期の伊万里１片，寛永通宝１点，近世の磁器１片，近世土師器（蔵骨器８片，不明１片），珠洲（壺１片，不明１片），越中瀬戸（すり鉢１片，不明１片），龍泉窯の青磁椀１片，総計17片である。これらのうち３点を図示した（図版３の５～７）。

図版３の５は龍泉窯の青磁椀の破片であり，色調は暗青緑色を呈する。胎土は緻密であり，焼成は良好である。

6は土師器皿である。外面底部に回転糸切り痕を残す。

7は寛永通宝である。表面は多少摩耗しているが，4つの文字はよく読みとれる。

（松田　留美）

(4)　宮路（みやじ）遺跡（図版12の128）立山町宮路

遺跡は常願寺川右岸の扇状地の扇頂部に立地し，宮路集落の南に接して位置する遺物包含地である。標高は190～195mを測り，規模は東西約150m，南北約200mに及ぶものと推定される。遺跡は現在，水田・墓地として利用されている。

遺物は中近世のもので占められ，珠洲5片，越中瀬戸14片，陶磁器3片，越中瀬戸無釉陶器多数が採集された（図版3の8～19）。

図版3の8は珠洲のすり鉢の底部付近である。内面には幅2cm程度のおろし目を施し，使用のため摩滅している。Ⅲ期（13世紀後半）に比定される。色調は暗青灰色であり，胎土は緻密である。砂粒を混和する。

9は珠洲の甕の胴部である。外面には3cm幅に7.5本程度の粗い叩き目が付き，Ⅳ期（14世紀）の後半の可能性が高い。色調は青灰色を呈し，胎土は緻密で砂粒を多く含む。

11は珠洲の小壺の底部であり，底径は8cm程度である。底部は静止糸切であり，内面には轆轤成形による器面の凹凸が著しい。色調は暗青灰色を呈し，胎土は緻密であり，砂粒の混和がある。

12は越中瀬戸の椀の口縁部である。口径は11cm程度であり，内外面に黒褐色に発色する鉄釉がかかる。色調は灰白色を呈し，胎土は極めて緻密である。

13は越中瀬戸の椀の底部である。高台は轆轤回転ヘラ削り調整を施し，器の内外面には黒褐色に発色する鉄釉がかかる。色調は黄褐色を呈し，胎土は緻密であり砂粒を多く含む。

14・15は，それぞれ越中瀬戸の壺の口頸部・肩部であり，これらは同一個体である。口径は17cmを測り，内外面ともに茶褐色に発色する鉄釉がうすくかかっている。色調は黄褐色を呈し，胎土は緻密で砂粒を多く含む。

16・17・10は，それぞれ無釉越中瀬戸の蔵骨壺の口縁部・胴半部・底部である。胴下半部の破片には墨書がみとめられる。

18は，手づくねによる土師器皿である。口径は9cm程度であり，14世紀ごろのものであろう。

19は土師器皿である。口径7cm，底径4.5cm程度であり，回転轆轤で成形し，底部は回転糸切である。口縁部には煤の付着がみとめられる。15世紀ごろのものと考えられる。

（宮田　明）

(5)　東中野新（ひがしなかのしん）Ⅰ遺跡（図版12の129）立山町東中野新

遺跡は，常願寺川流域に広がる扇状地の扇頂部右岸側，栃津川右岸の天林段丘の西麓に位置し，標高は200～205mを測る。規模は東西約200m，南北約230mに及ぶものと推定される。なお遺跡は現在，水田として利用されている。

今回の調査で採取した遺物は，青磁１片，磁器１片，越中瀬戸２片，珠洲11片，総計15片である。これらのうち，青磁１片，越中瀬戸１片，珠洲８片，総計10片を図示した（図版３の21～30）。

図版３の21は珠洲のすり鉢の口縁部破片である。復原口径は16cmを測る。焼成は還元硬質であり，内面，外面に回転撫で調整を施す。色調は灰白色を呈し，胎土は緻密で細かい砂の粒子を少々含む。卸目はみとめられない。内面にすすが付着する。

22は，青磁の椀の破片である。内面，外面に暗緑黄色を発する釉を施す。色調は暗緑黄色を呈し，胎土は緻密で所々黒の細かい粒子を含む。

23は珠洲の壺の破片である。焼成は還元硬質であり，内面，外面に回転撫で調整を施す。胎土は，白や黒の少々大きめな砂の粒子を含む。轆轤成形のものであり，櫛目文を肩部に施す。

24は珠洲の壺の口縁部破片である。復原口径は36cmを測る。焼成は還元硬質であり，内面，外面に回転撫で調整を施す。色調は青灰色を呈し，胎土は粗めで白，黒の粒子を含んでいる。

25は珠洲の甕の破片である。焼成は還元硬質であり底部近くの破片とみられ，破片上部の外面に平行叩きを施す。色調は青灰褐色を呈し，胎土は緻密である。

26は珠洲の甕の破片である。焼成は還元硬質であり，外面には平行叩きを施す。色調は青灰色を呈し，胎土は所々に大粒の砂を含む。

27は珠洲のすり鉢の破片である。焼成は還元硬質であり，内面，外面に回転撫で調整を施す。色調は青灰褐色を呈し，胎土は緻密である。

28は越中瀬戸の鉢の口縁部破片である。復原口径は15cmを測る。内面上部，外面に黒色を発する鉄釉を施した上に，茶色を発する鉄釉が上塗りされている。色調は茶褐色を呈し，胎土は緻密である。

29は珠洲の壺の口縁部破片である。焼成は還元硬質であり，内面，外面に回転撫で調整を施す。色調は黒灰色を呈し，胎土は緻密であり，細かい粒子を含む。

30は珠洲の椀の口縁部破片である。復原口径は15cmを測る。内外面に回転撫で調整を施し，端部は軽く面とりが施され，体部は内湾して立ち上がる。焼成は還元硬質である。色調は青灰色を呈し、胎土は緻密である。　（海道　順子）

(6)　東中野新Ⅱ遺跡（ひがしなかのしん）（図版12の130）立山町東中野新

遺跡は常願寺川流域に広がる扇状地の扇頂部右岸側，栃津川西岸の天林段丘の西麓に位置し，東中野新集落の北方に東西約300m，南北約250mの規模で広がっている。標高は215mを測る。本遺跡は現在主に水田として利用されている。

今回の調査での採集遺物は中近世のみに限られ，土師器片１，越中瀬戸５片，伊万里２片，瓷器系陶器１片である（図版３の31・32）。

31は伊万里椀の底部であり，波佐見の製品と想定される。

32は越中瀬戸の天目椀の底部であり，見込み部に鉄釉を施すが，外面底部には施釉しておら

ず，削り出し高台である。　（中村　大介）

(7)　横江中野林遺跡（図版12の131）立山町横江字中野林

遺跡は常願寺川右岸の段丘縁辺部に立地し，宮路遺跡の南東約650ｍに所在する。標高は，約212ｍを測り，規模は東西約150ｍ，南北約250ｍと考えられる。なお遺跡は現在，畑や水田として利用されている。

今回採集した遺物は，縄文時代の土器２片である（図版４の39・40）。

39は浅鉢の口縁部破片である。復原口径は約29㎝を測る。口縁部がゆるやかに外反する。内面には２条の沈線が横行し，斜行縄文が施されている。外面は磨かれている。色調は内面が灰茶褐色，外面が茶褐色を呈し，胎土は砂粒を多く含む。縄文時代後期中葉ごろのものであろう。

40は深鉢の胴部破片であろう。外面にはRL縄文が施されているが，摩滅が激しい。色調は内面が黄褐色，外面が淡黒褐色を呈し，胎土は砂粒を含む。　（松山　温代）

(8)　横江Ⅰ遺跡（図版12の132）立山町横江

遺跡は常願寺川の谷口から広がる扇状地の基部にあたる右岸段丘上に立地する。標高はおよそ240ｍを測り，遺跡は現在主に水田として利用されている。

採集した遺物は，土師器１片，珠洲５片，伊万里１片，越中瀬戸２片，青磁２片，石器１点である。そのうち３片を図示した（図版４の33～35）。

図版４の33は，打ち欠き石錘である。

34は，越中瀬戸の灯明皿である。底部は回転糸切り痕を残し，内面に鉄釉を施す。外面露胎。

35は，珠洲の甕の破片である。外面に３㎝幅に６条の叩きを施す。Ⅳ期（14世紀）ごろのものであろう。

36は，越中瀬戸の椀である。内外面に鉄釉を施す。　（野川　裕二）

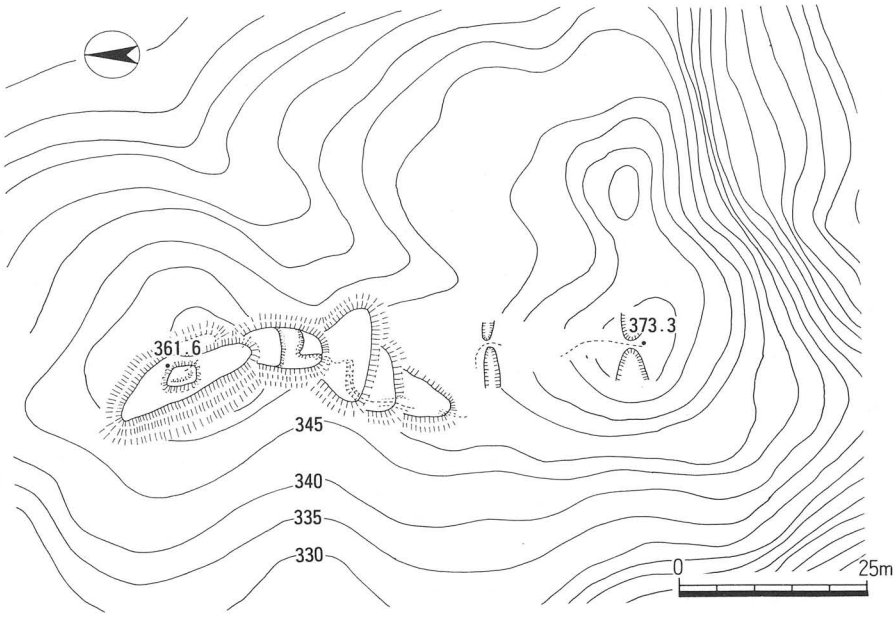
この遺跡は，従来中近世のものと思われていたが，縄文時代の遺物が発見されたことは，新たな知見である。

(9)　横江Ⅱ遺跡（図版12の133）立山町横江

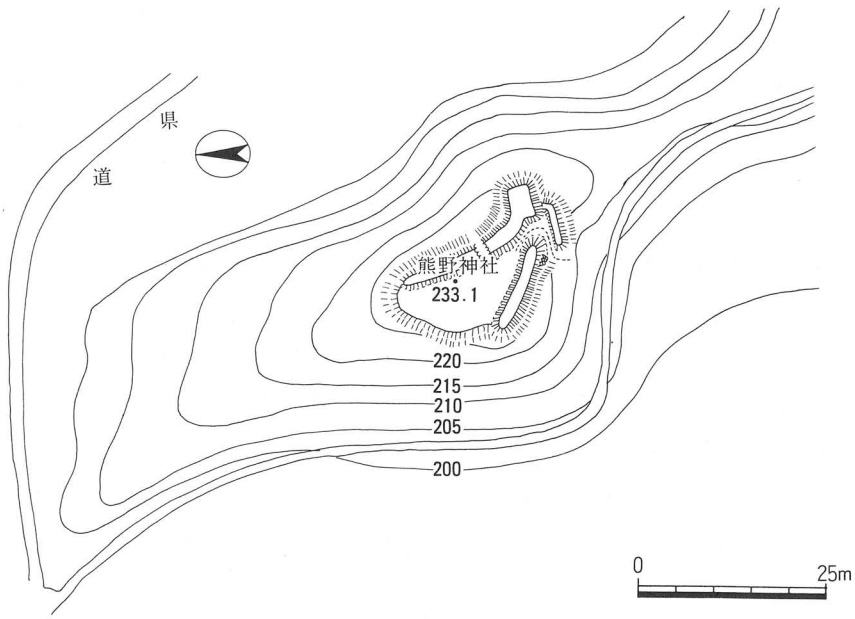
遺跡は常願寺川扇頂部，横江集落の東に位置する近世の墓地であり，標高は約242ｍを測る。墓地には積み石が施され，一部蔵骨器が露出していた。今回の調査では，その周辺から近世の蔵骨器と思われる無釉越中瀬戸壺の破片多数と，磁器１片を採集した（図版４の36～38）。

37は無釉越中瀬戸の蔵骨器であり口径16㎝，口縁は直立し内外面とも轆轤調整が顕著である。後の蓋と対応するものと思われる。

38は無釉越中瀬戸の蔵骨器の蓋であり，内外面とも轆轤調整が顕著である。頭頂部は回転糸切りである。また外面には墨書があり，「皿」という文字が読み取れるが，もう一方の文字は判読不可能である。　（長谷川　幸志）



第５図　池田城縄張図（前川　要・松原和也作図）



第６図　新宮山城縄張図（前川　要・松原和也作図）

(10) 新宮山城跡（図版12の134）立山町栃津１

遺跡は，常願寺川右岸の扇状地の扇頂部を見下ろす位置にあり，常願寺川と栃津川にはさまれた南東から北西にのびる丘陵の先端部，標高約230ｍに位置する。

中世の城館と言われているが，文献は存在しない。現在は熊野神社が存在する。縄張りは，東面と南面に幅３ｍの土塁と東南隅に隅櫓状の突出をもつ。虎口部分に枡型をもち，南斜面の一部に石垣が三段残存する。織豊系城郭技術の影響がみられる。北側には顕著な遺構は見られず，南向きの縄張りと想定される（第７図）。

今回の調査で採取した遺物は，細片のため図示していないが，土師器細片が13片ある。その中で，京都系の非ロクロ土師器皿は４片ある。口縁部がある１片は，16世紀代と考えられるが細片であるため確かではない。ロクロ土師器は２片あり，これも細片であるため時期を確定できない。また，８世紀中葉以前に遡る土師器甕の細片が１点ある。外面に刷毛目調整を施し，煤が付着する。その他に詳細不明な土師器細片が６片ある。（榊原　滋高）

(11) 池田城跡（図版13の135）立山町池田

遺跡は，池田集落の南方にそびえる城山に位置し，標高361.6ｍを測る。

縄張りは，南より２個所の掘切を越え，４個所の郭を通過してのち，主郭に至る。主郭には，中央部に南縁に低い土塁状施設をもった天守台状の部分が存在する。主郭北側には帯曲輪が見られる（第６図）。

遺物は，全く採集できなかった。（榊原　滋高）

(12) その他の採集遺物

遺跡として設定した地区外の収集品である（図版４の41～51）。

41は縄文時代の打製石斧である。全長16.8cm，最大幅7.4cmを測る。刃部に垂直方向の使用痕が確認される。12－イ地区。

42は珠洲の甕の胴部破片である。外面に粗い平行叩きがある。胎土は密であり白色粒を含む。色調は青灰色であり，焼成は還元硬質である。４－ニ地区。

43は縄文土器胴部破片である。外面に縄文が施されているものの摩滅が激しい。胎土は砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は内面が褐色，外面が灰褐色を呈する。４－イ地区。

44は越中瀬戸小杯の破片である。口径は約９cm，高台径は５cmを測り，器高は5.2cmである。内面に灰釉を施し，外面及び，口縁部周辺には黒色を発色する鉄釉を施している。腰部は丸みをもち，そこから口縁部までほぼ直立にのびている。胎土は密であり白色粒を含む。焼成は良好である。12－ニ地区。

45は越中瀬戸椀の底部破片である。高台径は４cmを測る。内外面に茶褐色を発色する鉄釉を施し，さらに，その上に黒色を発色する鉄釉を施している。胎土は密であり白色粒を含む。色調は灰黒色であり，焼成は良好である。11－イ地区。

46は越中瀬戸椀の底部破片である。高台径は３cmを測る。内外面に黒色を発色する鉄釉を施

している。また，底部には回転糸切り痕がみられる。焼成は良好であり，胎土は密で砂粒をごくわずかに含む。7－ニ地区。

47は越中瀬戸椀の底部破片である。高台径は5㎝を測る。底部には回転糸切り痕がみられる。また，内外面とも回転ナデ調整が施されている。胎土は密でありわずかに白色粒を含む。焼成は良好で色調は明灰色を呈する。7－ニ地区。

48は須恵器杯Aの底部破片である。底径9㎝を測る。底部外面にはヘラ切り痕がみられる。胎土は密であり白色粒がわずかに混じる。色調は青灰色である。8世紀のものであろう。12－イ地区。

49は越中瀬戸椀の口縁部破片である。口径12㎝を測り，内外面に灰釉を施す。胎土は緻密であるが，細かい黒色粒を多く含む。4－ニ地区。

50は須恵器長頸壺の口縁部破片である。口径は13㎝を測る。内外面に回転ナデ調整が施されている。口縁部はわずかに外反する。胎土は密であり色調は青灰色である。

51は産地不明の近世陶器である。口径30㎝を測る。9－ロ地区。　　（小野木　学）

2　遺物の散布状態（第8～12図）

1992年度の調査によって，Ⅵ地区から234破片，口縁部75.3個体分の資料を採集した。これらは縄文時代から近世に至るものであり，従来点的にしか判明していなかった河岸段丘下面の利用状況を知るための貴重な資料になるものである。

なお本年度調査地区は，大きくみれば西側は常願寺川の河岸低位段丘の氾濫原に相当するが，東端は栃津川の複合扇状地（Ⅷ1地区）と白岩川上流の山間部（Ⅷ2地区）である（第2図）。標高は，Ⅷ1地区が河岸低位段丘が213m～258mを測り45mの比高差を有し，複合扇状地部分は138m～258mを測り120mの比高差を有する。Ⅷ2地区は盆地が250m前後であり，山城が362mであるので，112mの比高差を有する。

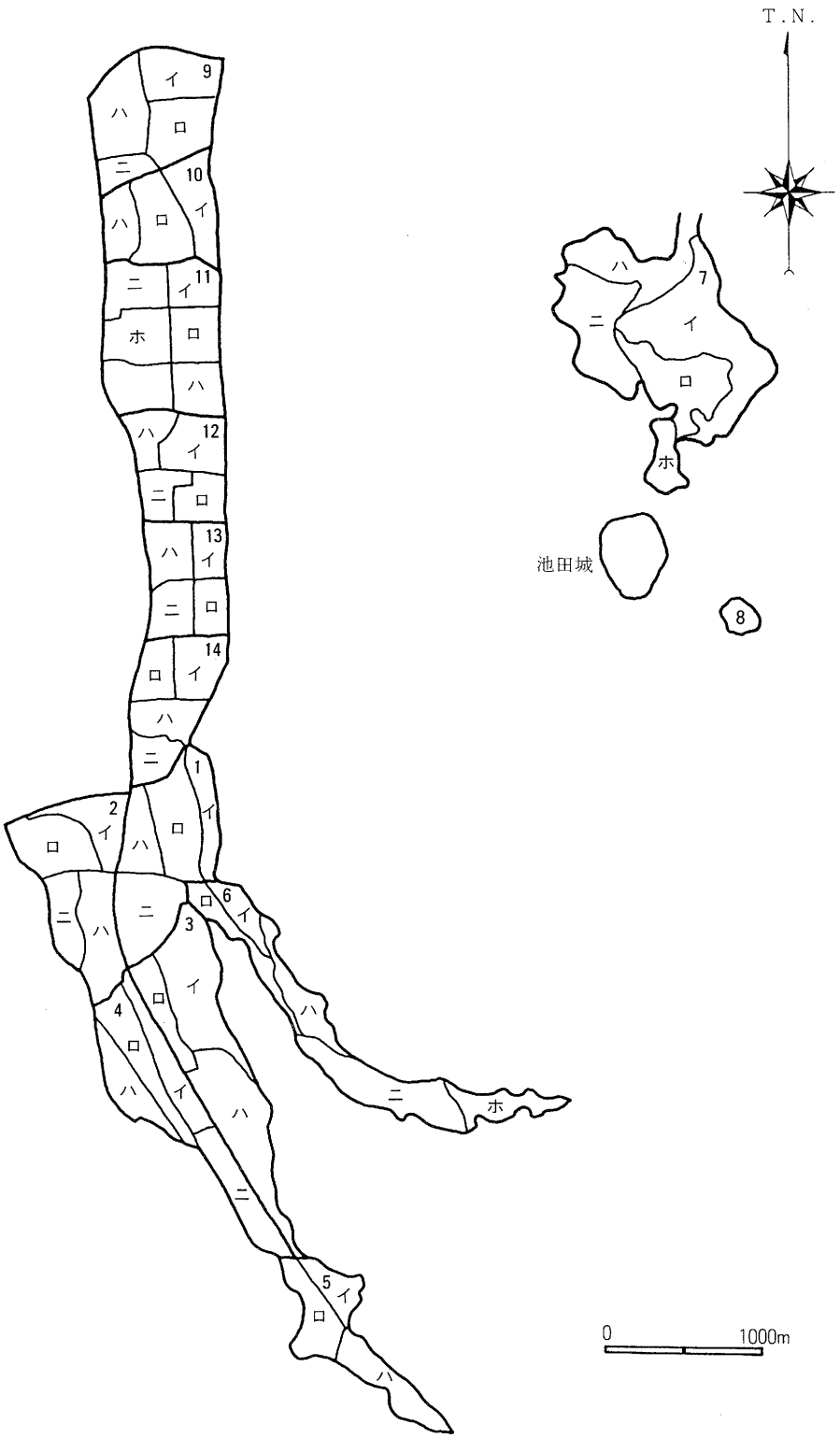
(1)　縄文時代遺物の散布状態（第8図）

縄文時代の遺物は，土器14片，口縁部残存率で1.2個体，石器2点である。小破片が多く，器種を同定できるものはほとんどない。時期は，後期を中心に一部晩期におよび，56小地区中4地区で採集した。特に，1のロ地区，4のハ地区は，それぞれ下田Ⅱ遺跡，横江中野林遺跡に相当しており，遺物の若干の分布がみられる。

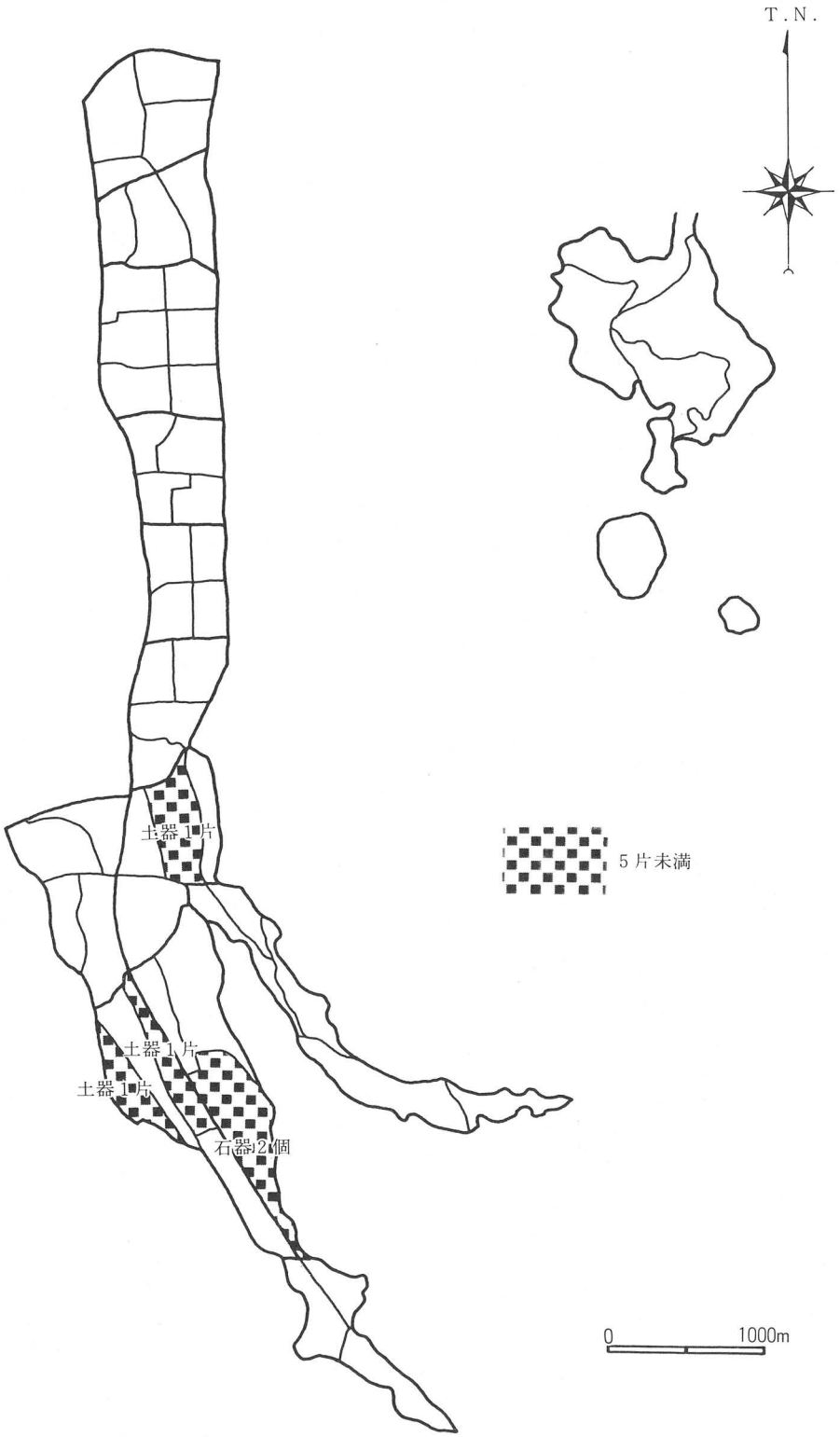
散布状態は，河岸低位段丘の常願寺川右岸に散在的に分布しており，標高の高低による分布の差は認めにくい。

(2)　弥生・古墳時代遺物の散布状態（第9図）

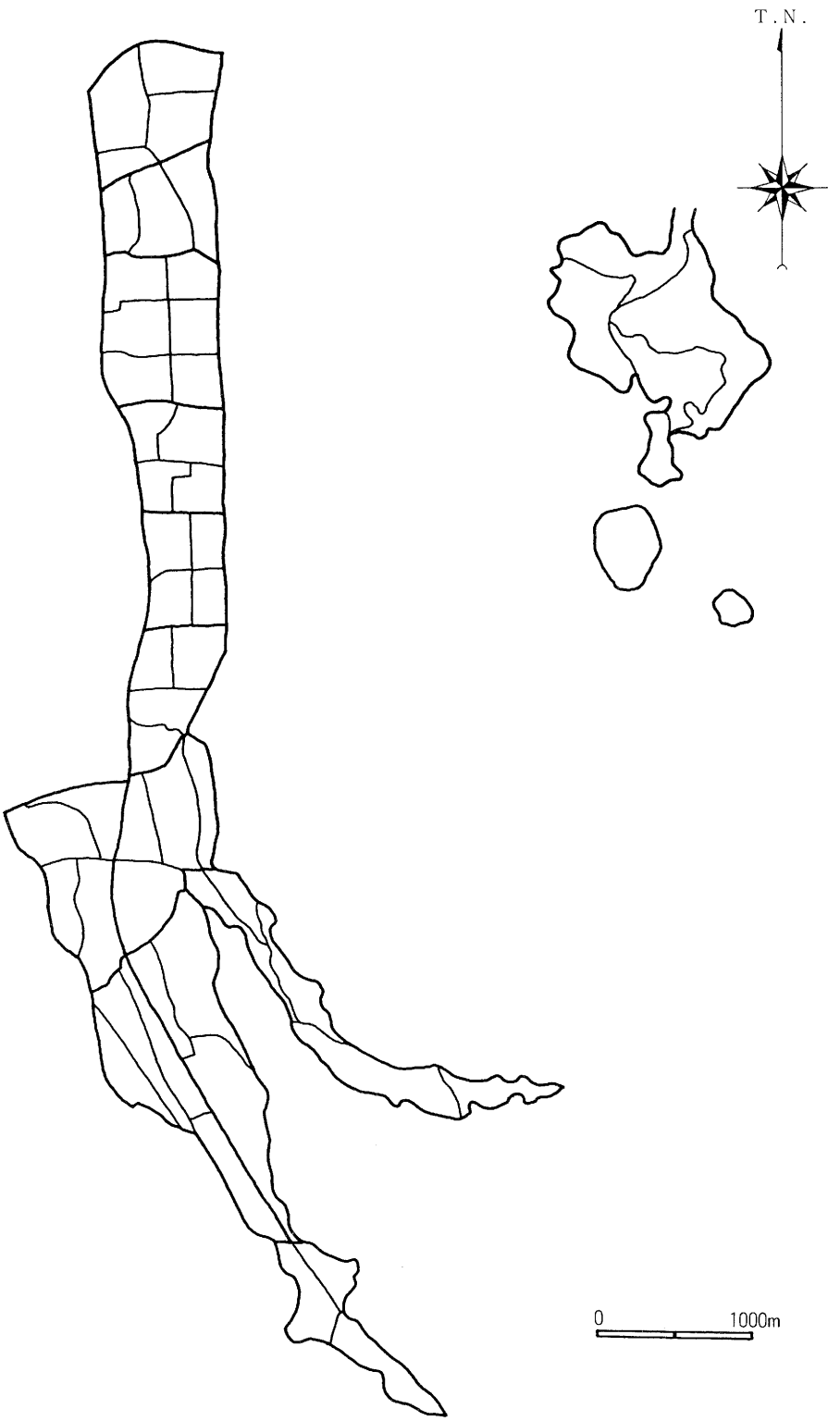
弥生・古墳時代の遺物は，1991年度同様皆無であった。1987・1988年度扇状地端部の調査では，縄文・古代・中世を上回る量の資料を採集できたことと対照的である。



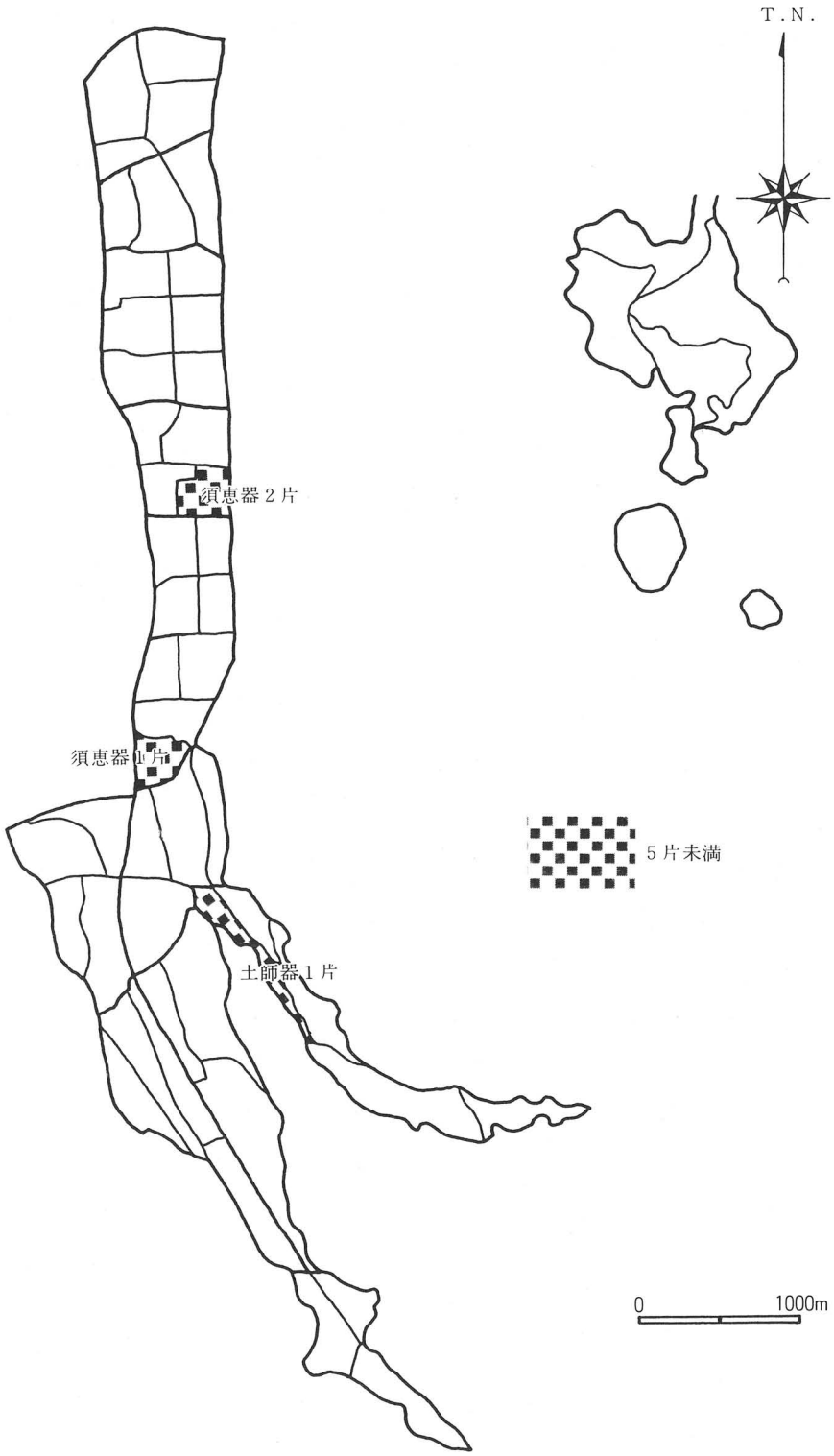
第7図　Ⅷ地区の地区名



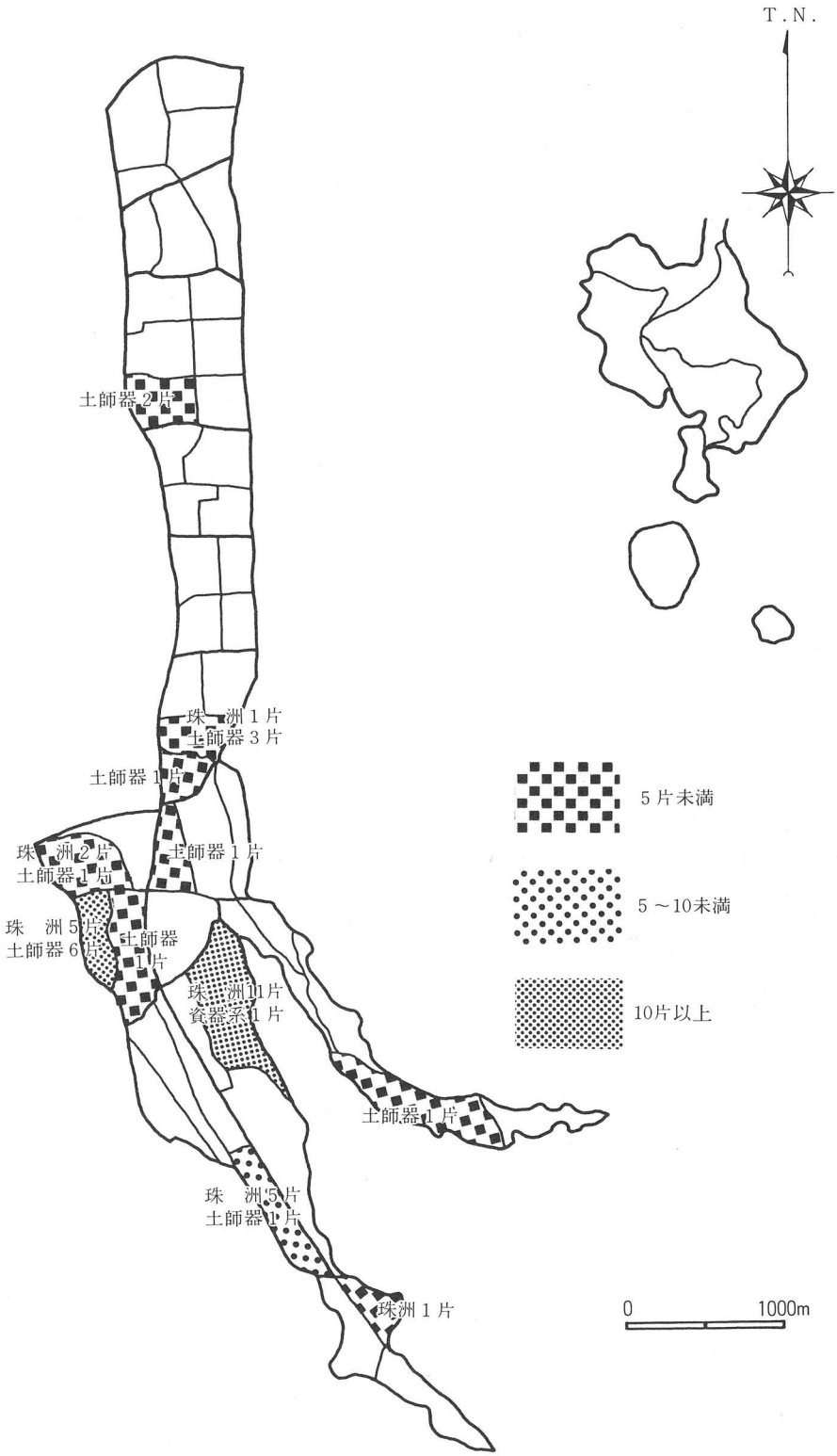
第8図　Ⅷ地区縄文時代遺物の散布状態



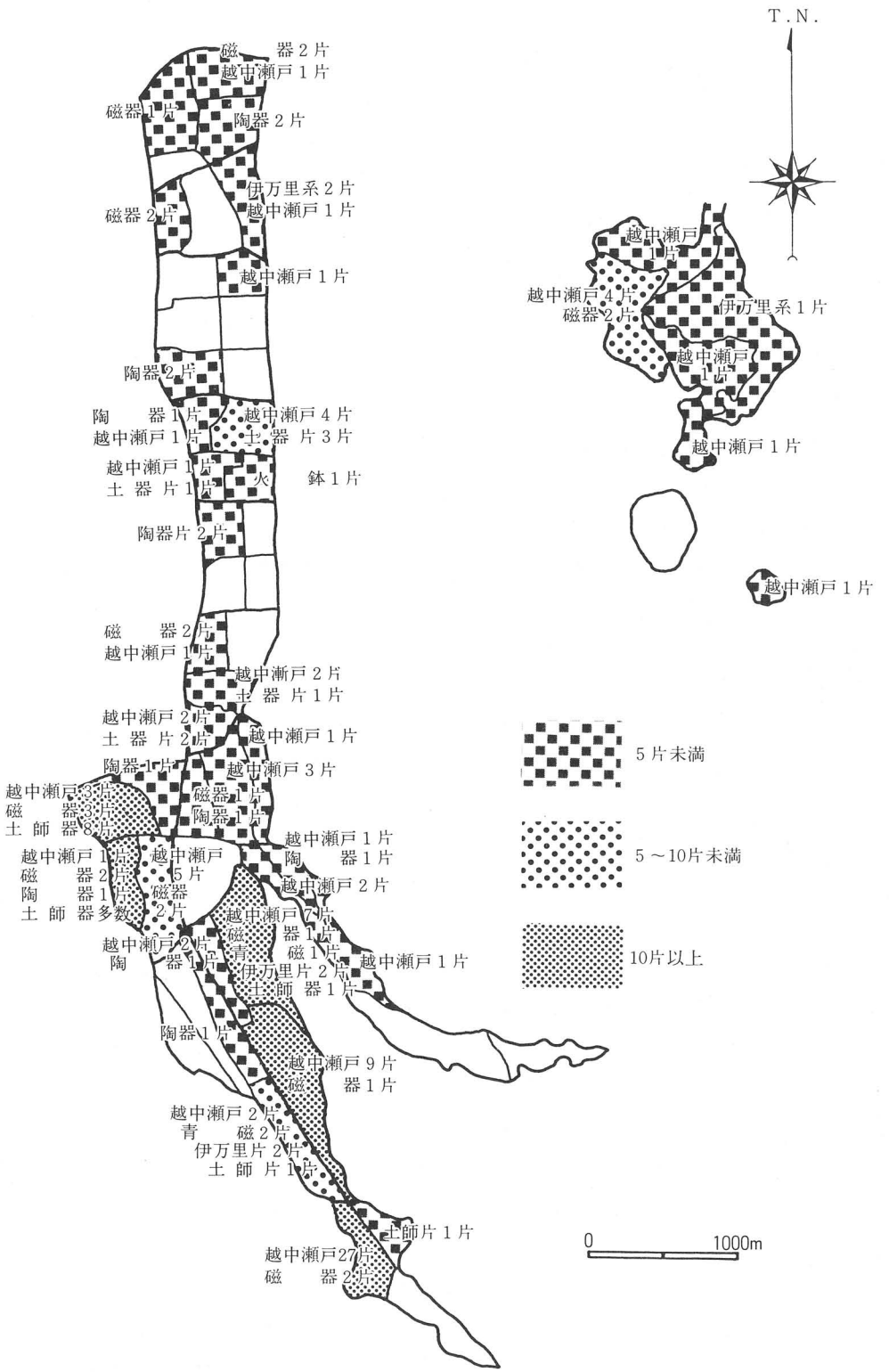
第９図　Ⅷ地区弥生・古墳時代遺物の散布状態



第10図　Ⅷ地区古代遺物の散布状態



第11図　Ⅷ地区中世遺物の散布状態



第12図　Ⅷ地区近世遺物の散布状態

(3) 古代遺物の散布状態（第10図）

古代の遺物４片を３小地区で採集した。須恵器は３片，口縁部残存率で0.3個体，土師器は長甕１片からなる。７世紀の遺物は確認できず，すべて８世紀初め以降のものである。

散布状態は，河岸段丘面と栃津川に挟まれた場所に散在的に分布する。この事実は，河岸段丘上に存在する該期の遺跡との関連が想定される。

(4) 中世遺物の散布状態（第11図）

中世の遺物は，46片・12.2個体分を11小地区から採集した。土師器皿が17片・0.9個体分，珠洲甕25片・0.8個体分，青磁３片・0.9個体分である。12世紀から15世紀の資料が主であり，16世紀のものは確認できない。なお，八尾窯産の製品と思われるものが１点のみある。

散布状態は，古代同様河岸段丘面と栃津川に挟まれた場所に散在的に分布するが，面的および量的に若干増加している。

(5) 近世遺物の散布状態（第12図）

近世の遺物は，172片・61.6個体分を全調査小地区56地区中39地区から採集した。採集量も急増している。その構成は，越中瀬戸が144片・23.5個体分，伊万里系が16片・1.3個体分，土師器皿が18片・0.6個体分，寛永通宝１点である。

散布状態は，中世までとは異なり，扇状地と氾濫原を通じて調査地区に広く散布している。特に，栃津川左岸は，古代・中世ともに遺物が分布しないが，該期になるとほぼ全面に分布するようになる。詳細に見ると，自然堤防上の現在の各集落の位置付近には必ず散布しており，現集落が該期に成立した可能性が想定される。

(6) 散布状態の小結

以上のように，本年度調査地区においても，時期によって散布状態がかなり異なることが判明した。またその様相は，他の地区と共通するところと相違するところとがある。標高50ｍ以上の河岸低位段丘やその周辺における散布状態には，以下のような特徴があると考えた。

縄文時代においては，後期・晩期の資料が分散的に散布する。時期的には中期に河岸段丘上において集中的に散布するのに比して，かなり分散的である。この在り方は扇状地端部と同様であり，後晩期には集落が低地に移ったことを反映し，扇状地において広範な採集活動がおこなわれたことを示唆している。

弥生・古墳時代の遺物は，一点も採集できず，中・高位の河岸段丘と同様である。この時期に，扇状地端部では遺物の散布が激増していることと対照的である。

古代から中世にかけて，少量ではあるが再び遺物が散布するようになり，漸増していく。高位扇状地の再開発は，当地では８世紀初め頃以後に進行したと考えてよい。これは国家的な事業の一環としてなされた結果である可能性が高いと考える。この在り方は扇状地扇端部や小規模河川氾濫原の微高地と同様であるが，中・高位河岸段丘の再開発は10世紀以後とやや遅れるようである。

これに対して，中世の遺物はより分散的に散布している。また，古代の遺物を採集できる地区と，中世の遺物を採集できる地区とはあまり一致しないことが多く，時代の差が集落立地に表れている可能性が高い。

近世の遺物が激増することは，すべての地区で共通する現象であるが，扇状地高位部分においては特に顕著である。この地区は，洪水に対して安全であり，水はけも良く，居住地に適した条件を備えている。さらに，常願寺川低位河岸段丘，栃津川自然堤防上および氾濫原の微高地上に現在の集落が存在し，その周辺から必ず該期の遺物が採集できることは，現在の集落の景観が近世まで遡上することを示している。　　（前川　要）

第３章　８年間の分布調査を振り返って

立山町の遺跡詳細分布調査は，1985年度に始まり，本1992年度に無事完了することが出来た。町域の平地部をくまなく歩き，旧石器時代から近世に至るあらゆる遺跡を探索するという大変な仕事を成し遂げられたのは，関係各位の御指導，地元の方々の暖かい御理解，また各年度調査参加者の奮闘の賜物と厚くお礼申し上げる。

この分布調査により，総計12787破片，口縁部295.6個体分の遺物を採集し，古墳や山城の測量調査を行なった。その結果，遺物が集中的に散布する地点を中心として，135遺跡を設定した。ただし，全く遺物が散布しない地区はほとんどなく，遺跡として設定した地区以外についても，遺跡が存在する可能性が残されていることを御理解願いたい。時代によって，集村形態をとる場合と，散居村的である場合とがあるからである。そのため遺跡外と考えた地区の遺物採集地点も，すべて各年度の遺跡地図に図示したので参照されたい。

分布調査に際しては，各地区また各時代を通して，同じ精度で遺物を採集し，同じ方法で計量するという原則を立てた。その結果，遺跡の確認を行なっただけではなく，各地区における遺跡盛衰の大略が明らかとなり，立山町の歴史を考える上で多くの重要な事柄が判明してきた。これらについても，発掘された成果を含めつつ，ここで簡単にまとめておこう。なお，遺跡の詳細と参考文献等については，各年度報告を参照されたい。

私達が歩いた範囲は，河岸段丘（標高約50ｍ～200ｍの上段(うわだん)段丘，200～300ｍの吉峰・天林段丘，300～400ｍの芦峅寺段丘），デルタ・扇端部（標高約10～50ｍ），常願寺川と栃津川の複合扇状地（標高約50ｍ～250ｍ）が主なものであり，常願寺川・栃津川・白岩川の氾濫原，各小河川の開析谷，山城の所在する山頂部を含んでいる。立山町は標高約3000ｍの立山を含めて，地形・動植物相が多様であることに特色があるが，平地部には大河川である常願寺川と中小河川である栃津川・白岩川が流れ，扇状地と段丘地形とが発達している。

立山町の最古の遺跡は，上段段丘に立地する旧石器時代後期の白岩薮ノ上遺跡である。この遺跡では，今から２万年余り前に降下した姶良Tn（AT）火山灰層が発見され，ほぼ同じ層準から立野ケ原型ナイフ形石器が出土した。これは素材剥片が短かめであり，二次加工が簡単なナイフ形石器であり，局部磨製石斧・錐形石器等と出土している。これらは，確実なものとしては，北陸でも最も古い石器様式（石器群）に属するものである。

この時期は，最終氷期の最寒冷期に向う頃であり，奥村吉信氏は針葉樹・広葉樹混交林を基盤とする狩猟採集の生活がなされたことを推定している。なおこれより古い時期の遺跡が，当地に存在するかどうかを確かめることは，今後の大きな課題である。

以後，最寒冷期を経て，温暖化する縄文時代へと向い，大きな社会変動を経たと推定できる

が，縄文時代中期に至るまで一貫して，河岸段丘が主な生活の場として選ばれた。河川の氾濫に対して安全でありまた森と川の恵みを得やすい環境が，当時の生活にとっては，最も望ましいものであったのであろう。ただし標高22ｍの扇端部に立地する二ツ塚遺跡では縄文時代早期から後期に至る遺物が出土・採集されていることや，他の少量の採集例からみて，高位の河岸段丘を拠点として扇状地に及ぶ狩猟・採集・漁撈活動が行なわれたものと推定しておきたい。

縄文時代中期は，河岸段丘の遺跡の最盛期である。上段段丘から芦峅寺段丘に至るまで，ひしめくように，この時期の遺跡が立地した。遺跡の移動を考慮しても，やや異常に感じられる遺跡密度である。この頃，新潟県境に近い朝日町の境Ａ遺跡では，硬玉製装身具を含む大規模な石器生産を行ない，その製品は全国的に流通した。立山町の多数の遺跡でも，単に自給自足的な生活がなされたのではなく，何等かの考古遺物として残りにくい産物を集中的に生産して遠隔地の村の産物と交換する生活が行なわれていた可能性を考慮しておきたい。それは，石器組成から見て，森の産物であったと思われるが，今後の発掘調査の成果と自然科学的な分析とに期待するところが大である。

縄文時代後期以後になると，河岸段丘の遺跡が減少し規模も小さくなる反面，扇状地での遺物の散布が多くなり，金剛新遺跡のように拠点的な遺跡も成立した。河岸段丘よりも扇状地を中心とする生活に，転換しつつあったようである。その範囲は，扇端部から扇奥部に及んでいる。扇状地の森は，河川の影響を受けるため，有用樹種が多様な混交林が成立しやすい。またこの頃は，寒冷化の時期に当たり降水量の減少が扇状地の安定化をもたらしたとも推察できるであろう。ただし縄文後期から晩期にかけて，特に晩期では，遺跡数と遺物散布量が減少する傾向にある。これは北陸の一般的な傾向であろうが，何等かの社会的変動の結果であるのか，低地に大きな遺跡が埋れているのかは，大切な問題である。

弥生時代前期の確実な遺跡は，確認できていない。それが，河岸段丘・扇状地における採集活動を中心とする生活から，扇端部湧水地帯より下位に立地する水田を基軸とする生活に転換した結果であることは，容易に想像できることである。それは社会生活の根本的な転換と考えてよいものである。今後，扇端・デルタ部でこの時期の遺跡がどの程度存在するのかを明らかにすることが課題であろう。この時期以後，高位の場所を如何に再開発していくかが，大きな課題となる。大規模な扇状地や河岸段丘において水田開発を行なうことは，かなりの開発技術と労働力とを必要とするのである。

弥生時代中期には，標高約13ｍの扇端部微高地に立地する浦田遺跡において，遺構・遺物が出土している。土器は櫛描き文を多用する畿内第Ⅲ様式に並行するものである。そして，弥生時代後期から末にかけては，扇端部を中心として，多数の遺物を採集することができた。特に月影式期（畿内第Ⅴ様式新～庄内式古並行）がピークをなし，辻遺跡土器ダマリ出土土器は，北陸東部の白江式（庄内式新並行）の標識資料となっている。塚越・鉾ノ木・浦田・辻遺跡等が代表的なものであり，かなり大きな村が営まれたと考えられる。この時期は，北陸でも遺跡

が多く，軍事的な性格をもったであろう高地性集落も営まれる時期である。そして芦峅寺段丘の標高約400ｍの地に立地する古屋敷遺跡からも当期の遺物が出土しているように，この時期には意外な場所に遺跡が存在する可能性がある。

古墳時代（４～６世紀）に至ると，扇端部を中心として古墳が築造される。浦田に所在する稚児塚古墳は，直径約45ｍと富山県下最大の円墳であり，塚越古墳も直径27～33ｍと大型の円墳である。また上段段丘の北端部に築造された藤塚古墳は直径約20ｍの円墳であるが，竪穴式石室から仿製方格規矩鏡１面，鉄剣１点，鉄槍２点が出土している。

古墳時代の遺物については，標高53ｍの扇端部やや奥に立地する大祖里神社前遺跡から，６世紀中頃の須恵器（TK10型式）を１点採集したに止まった。ただし標高約20ｍの若宮Ａ・Ｂ遺跡で古墳時代中・後期の遺構・遺物が出土しているように，扇端部を中心として集落が点在したものと推察できる。ただ遺物の採集量がごく少ないことは，有力者の墓とは反対に，集落の規模が弥生時代より小型化したことを反映している可能性がある。

古代（７世紀～12世紀初め頃）についてみると，現在の所，７世紀の資料が不明であることが重要である。今後，この時期の遺跡が発見される可能性もあるが，点在した集落が特定の場所に集約された可能性を考えておきたい。それは立山町域内の可能性もあるが，後の新川郡衙比定地である上市町地区もその候補となるであろう。

立山町の歴史を考える上で，８世紀は一つの転機となる時期であった。この時期から，扇端部における遺物散布量が著しく増加したばかりではなく，扇状地の高位部分にも，再び遺物が散布するようになり，上段段丘奥の標高200ｍ余の地区には須恵器生産を行なう上末窯が成立した。この過程を見ると，８世紀初めと同中頃が節目になったようである。

８世紀初めには，扇端部に遺跡が成立しただけではなく，標高150ｍ余の扇状地に立地する谷口遺跡においてまで遺物が散布するようになった。

この時期の集落変化の社会的背景を考える手掛かりを秘めているのは，辻遺跡出土の「里正」木簡である。これは木簡でも珍しい，長大型木簡であり，鎌田元一・石上英一氏らの教示によると，人を徴発することに関係するものらしい。これは，当地区で郷里制という行政機構が，実際に施行されたことと，大きな開発行為がなされることとが密接な関係をもっていたことを示すものであろう。辻遺跡では，水路状の溝ないし流路を，検出しているが，溜池・用水網の整備が高位の場所を水田開発する条件であったであろう。

８世紀中頃には，扇端部に多数の規模が大きな遺跡が成立したばかりではなく，少量ではあるが扇状地の最奥部にまで遺物が散布するようになり，上段段丘での須恵器生産が開始された。これについて，泉・寺田付近に比定される東大寺領大荊荘の設置との関係を考えることは難しいことではない。この時点で，新川郡衙比定地付近の須恵器生産は中断した。そして８世紀中頃から９世紀が，これら遺跡群の最盛期であったと考えてよいであろう。

以上に見る古代の開発は，どのような形でなされたのであろうか。藤原京・平城京の造営に

象徴される律令国家の完成と，その国家規模の開発行為の結果が立山町域で表われたと考えることは容易である。他方，「里正」木簡には「郡司射水」のような在地有力者と考え得る人名が記されている。おそらく「国家規模の開発」とは単純なものではなく，このような人々が，古墳時代の「越」という形ではなく，「越中国」の制度を通じて国家中枢部と直結して，強力な開発体制と開発技術とを得たという側面があったであろう。律令国家以後を考える場合には，むしろこのことの方が重要である。そして10・11世紀には，以上の集落は，ほとんど確認できなくなる反面，吉峰段丘という高位の場所や開析谷に，少量ではあるが遺物が散布するようになり，新しい局面が生まれてくる。

中世（12世紀中頃～16世紀）は，10・11世紀の在り方を背景としつつ，再び分散的で少量ではあるが，上段段丘から芦峅寺段丘に至る各河岸段丘，またデルタから扇状地最奥部に至るまで，広く遺物が散布するようになった。辻遺跡には，方形居館の濠の一画かと推定できる13世紀前半の溝があり，祭祀的な木製品等も出土している。中世の多くの遺跡は，単に分散的に存在したのではなく，このような拠点的な居館を軸にネットワークを形成していたものと思われる。また段丘の中で最も多くの遺物が採集できたのは，最も高位の芦峅寺段丘であった。このことは，これらの遺跡のつながりを考える際に，立山信仰の発展を考慮しなくてはならないことを示唆している。

中世の採集遺物の多くは，12世紀中頃から14世紀に属するものである。15世紀にはこれが減少し，16世紀と断定できるものは１点も存在しない。発掘調査でも，辻遺跡において，少量の美濃・瀬戸菊皿等が出土しているのが目立つ程度である。他方，池田城はじめ，山城には，この頃に属するものがあった可能性が高いであろう。遺物採集量の減少は，集落の集村化を反映するものと推定し，その確認を今後の課題としたい。

近世（16世紀末～19世紀中頃）には，上段段丘において越中瀬戸の活発な生産が始まり，伊万里・京焼きを加えたその製品の散布によって，遺跡の様相をうかがうことができる。近世の遺物の散布は，調査地区のすべてにおいて，最も広範に散布することに特徴がある。また近世以前の遺跡は現代の集落と必ずしも重ならないのに対して，現代の集落の付近には必ずといってよいほどに近世の遺物が散布する。また古代・中世では，扇端部に対して扇状地での遺物の散布は少量であったが，近世ではむしろ扇状地に中心が移りつつあるようである。

近代の立山町の平地部は，ほとんどくまなく集落・耕地として利用され，中心的な市街地は，五百石という扇状地の上に立地する。このような近代の立山町の景観の基本が，近世に，成立しつつあったのであろう。

以上，分布調査の成果に従来の発掘調査の成果を加えて紹介した。その前半期には高位の場所を拠点にして低地に進出し，後半期においては低地から高地へ生活の場を広げて，現代の町の景観が形成されたのである。ただし上述のように，今後さらに明らかにしていかなければならない課題も山積している。そしてその鍵が，立山町の多くの遺跡に秘められているのである。

これらの遺跡は，それぞれが立山町の歴史を考える貴重な文化遺産であり，後世に大切に伝えられ，活用されることを願う。そしてこの分布調査の情報が，今後の立山町の発展と文化財保護とが，共に成し遂げられる一助になれば，望外の喜びとするものである。

（宇野　隆夫，前川　要，三鍋　秀典）

参 考 文 献

1　富山県『富山県史』考古編，1972年。

2　立山町教育委員会『立山町史』上巻，1977年。

3　立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室『立山町埋蔵文化財分布調査報告』Ⅰ，立山町文化財調査報告書第1冊，1986年。

4　立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室『立山町埋蔵文化財分布調査報告』Ⅱ，立山町文化財調査報告書第冊，1987年。

5　立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室『立山町埋蔵文化財分布調査報告』Ⅲ，立山町文化財調査報告書第冊，1988年。

6　立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室『立山町埋蔵文化財分布調査報告』Ⅳ，立山町文化財調査報告書第冊，1989年。

7　立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室『立山町埋蔵文化財分布調査報告』Ⅴ，立山町文化財調査報告書第冊，1990年。

8　立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室『立山町埋蔵文化財分布調査報告』Ⅵ，立山町文化財調査報告書第冊，1991年。

9　立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室『立山町埋蔵文化財分布調査報告』Ⅶ，立山町文化財調査報告書第冊，1992年。

10　小島俊彰「北陸の縄文時代中期の編年」『大境』第5号，1974年。

11　南久和『北陸の縄文時代中期の編年他9編』1985年。

12　能都町教育委員会『真脇遺跡』1986年。

13　吉岡康暢「奈良・平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』1983年。

14　石川考古学研究会『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』資料編・報告編，1988年。

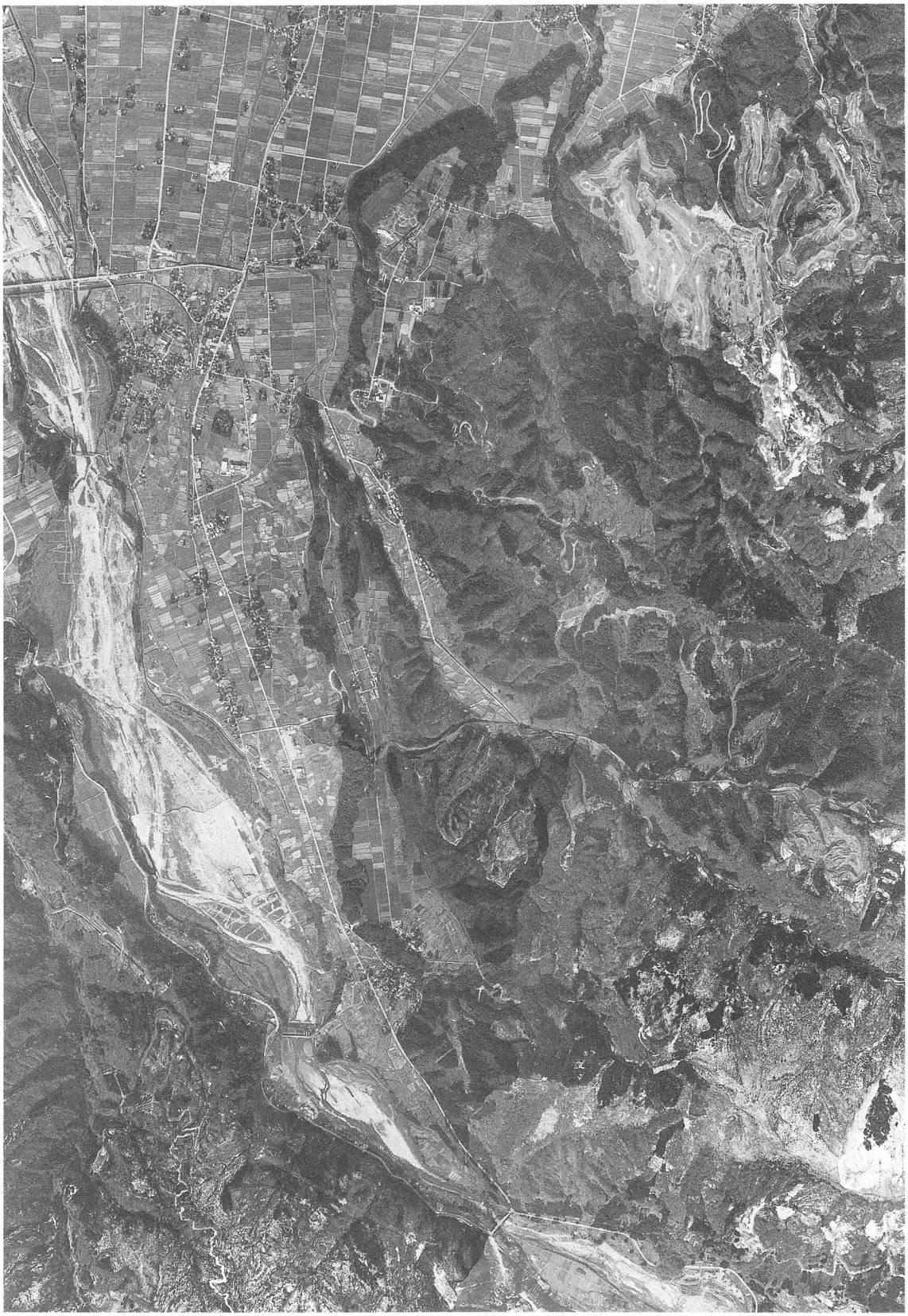
15　吉岡康暢「加賀・珠洲」『世界陶磁全集』3日本中世，1977年。

16　吉岡康暢『日本海域の土器・陶磁』中世編，人類史叢書10，1989年。

17　宮田進一「越中瀬戸の窯資料(1)」『大境』第12号，1988年。

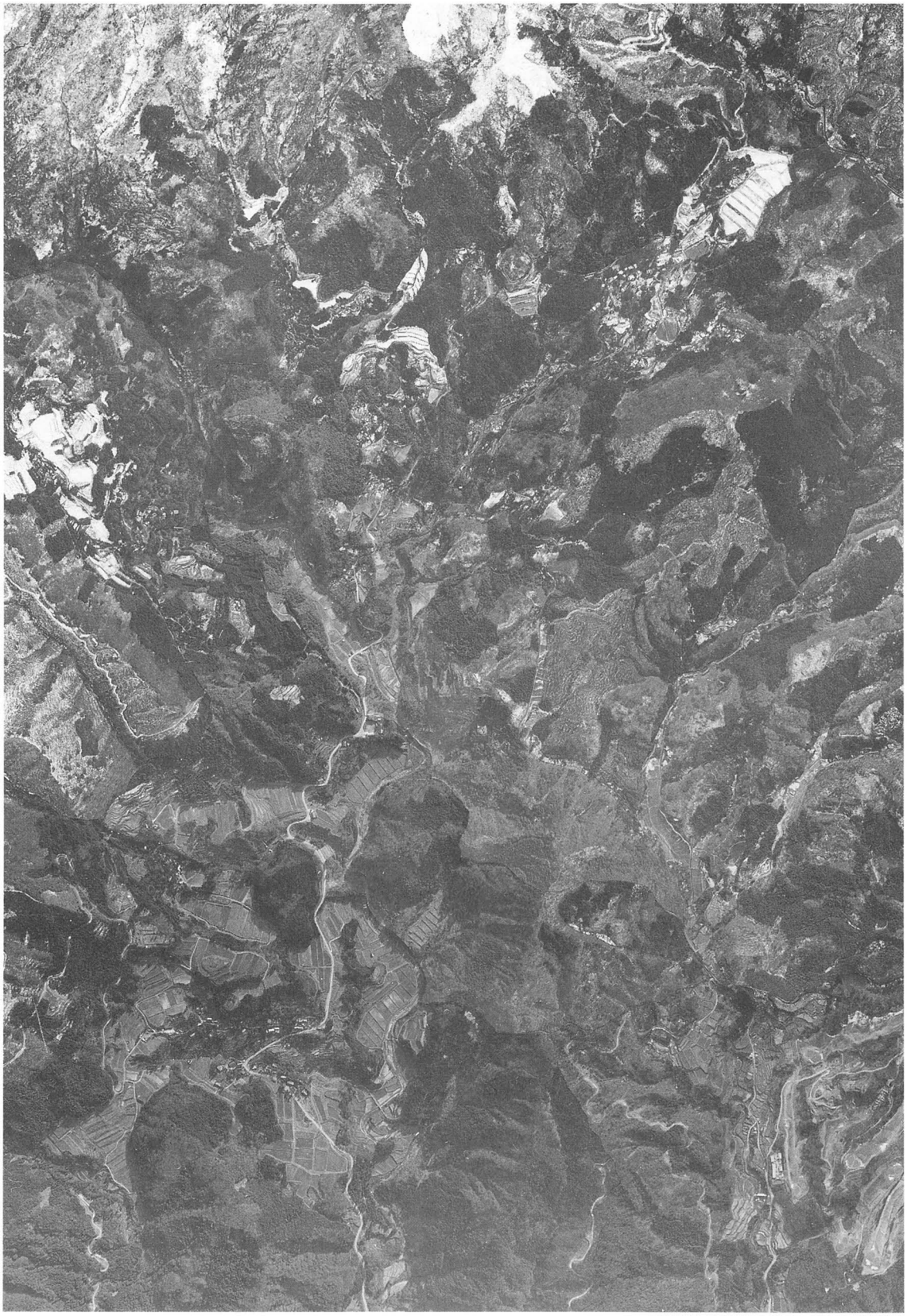
図　　版

図版一　Ⅷ地区航空写真（一）

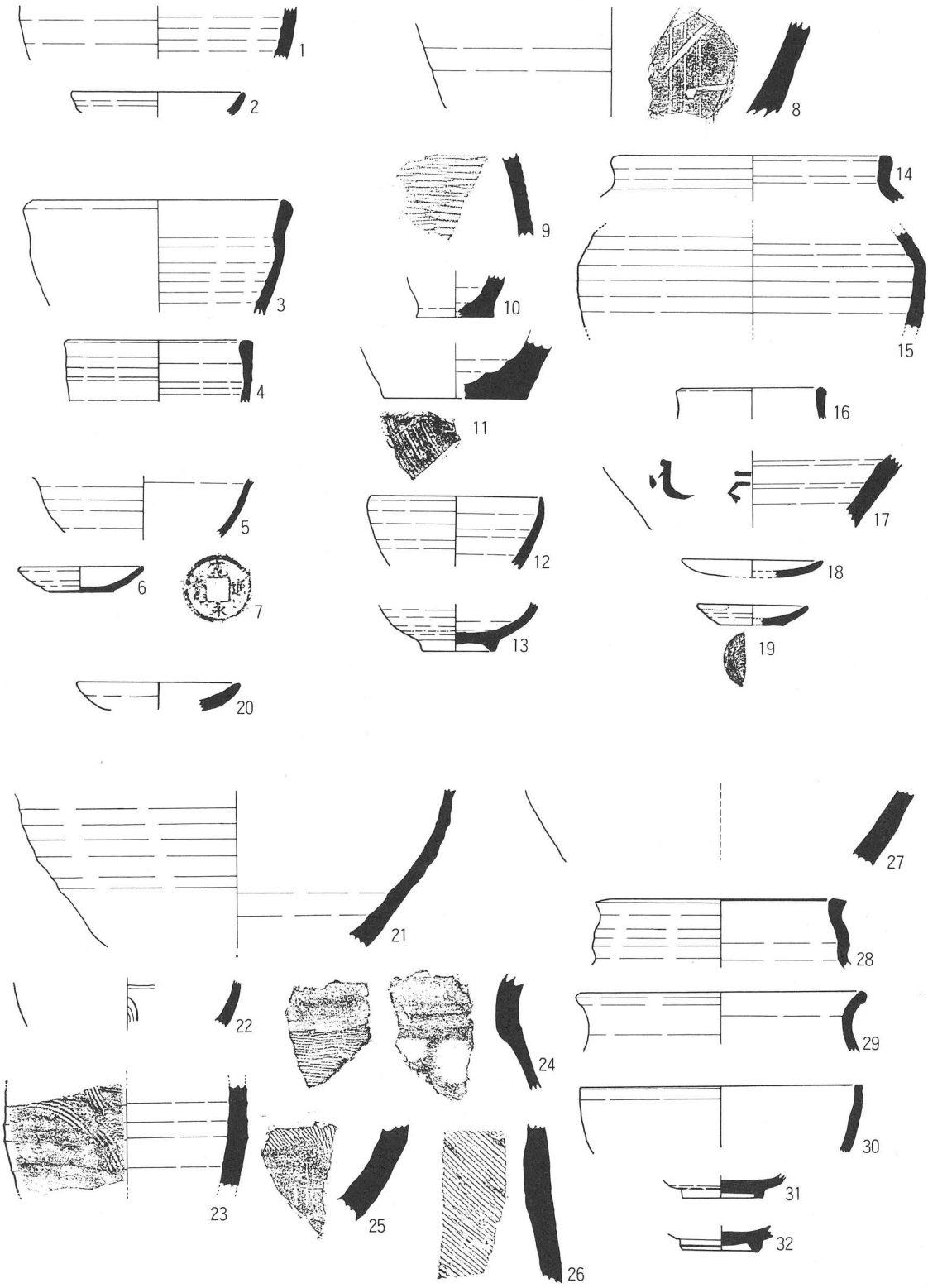


1991年撮影（Ⅷ１地区）

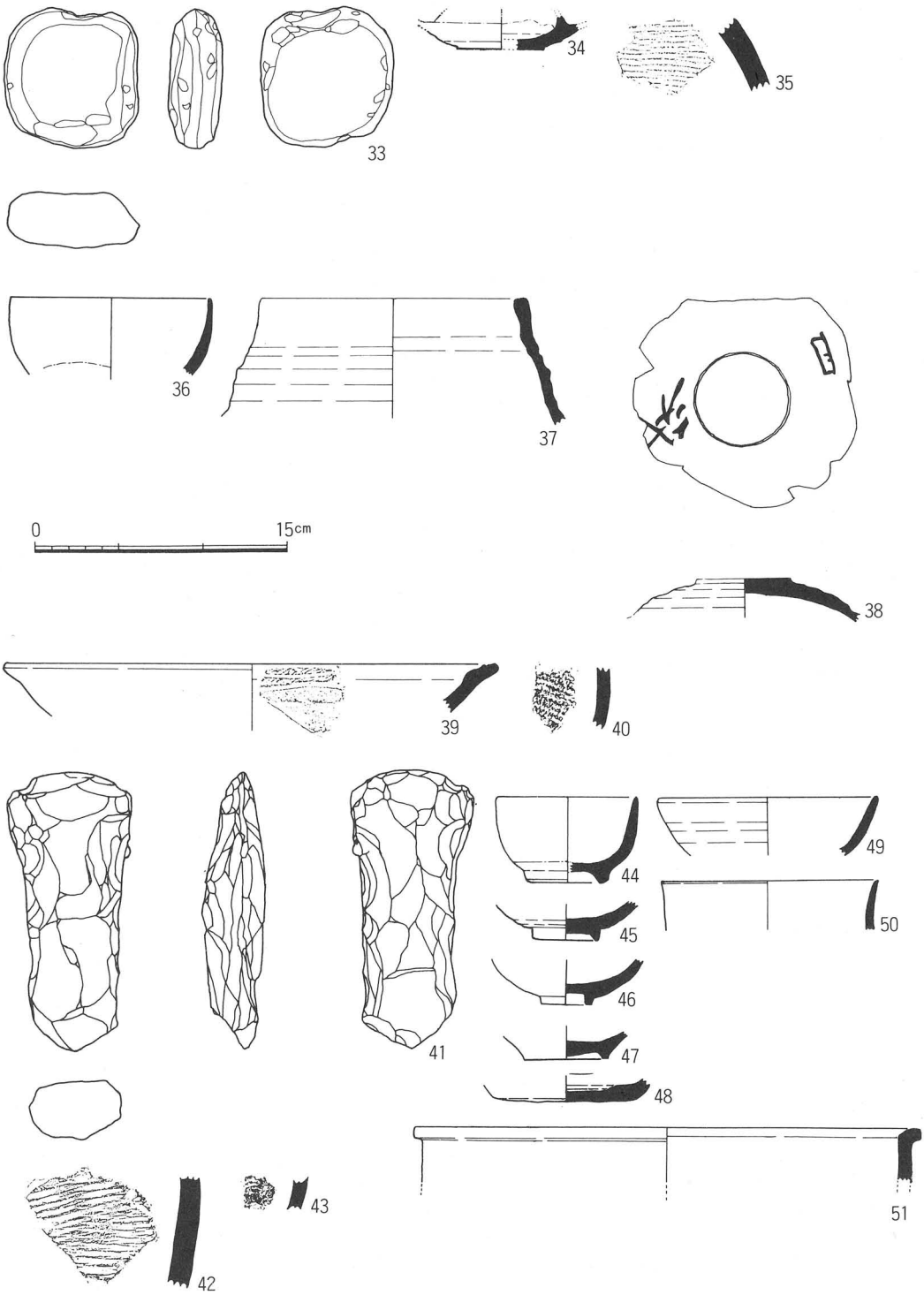
図版二　Ⅷ地区航空写真（二）



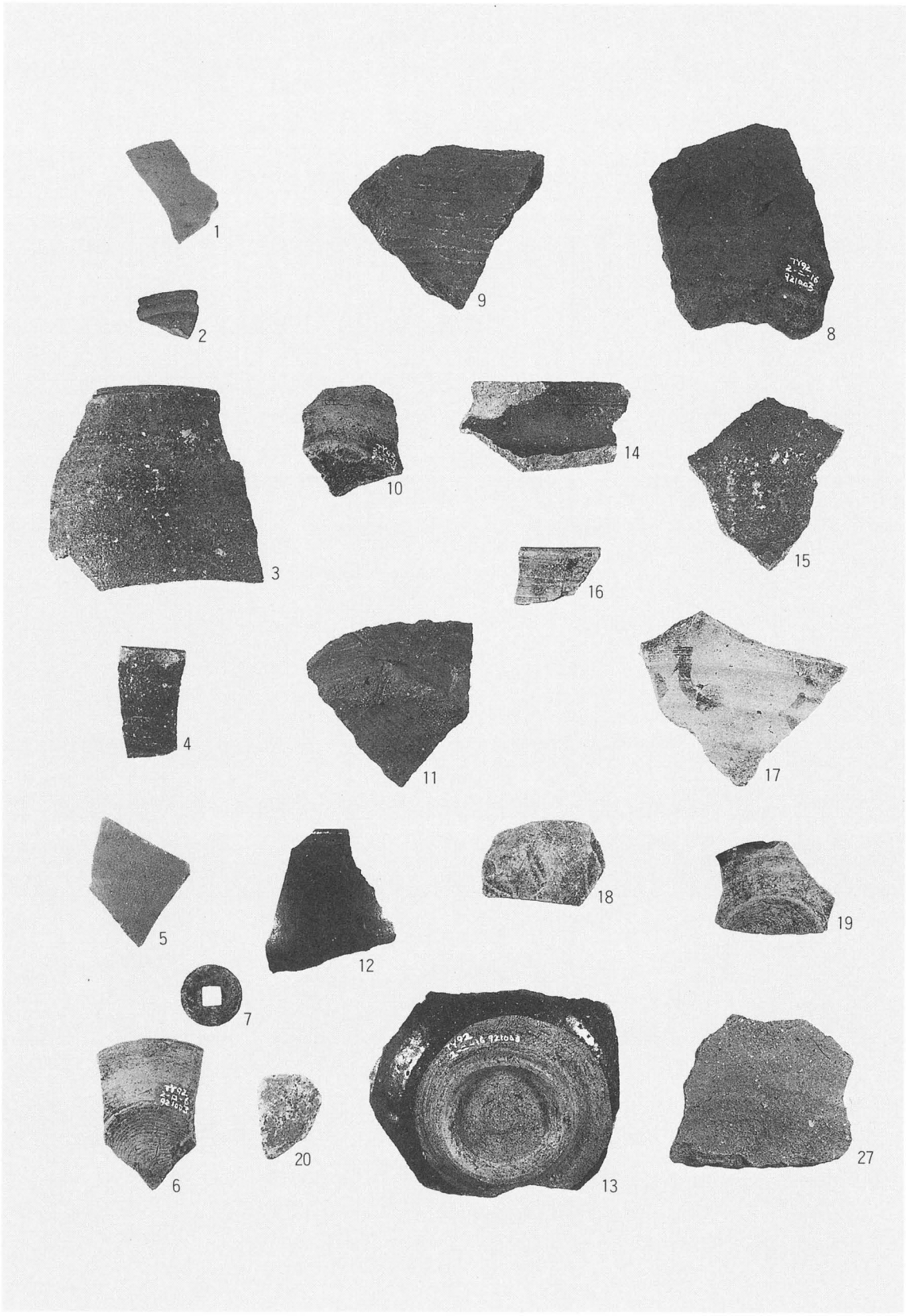
1991年撮影（Ⅷ２地区）

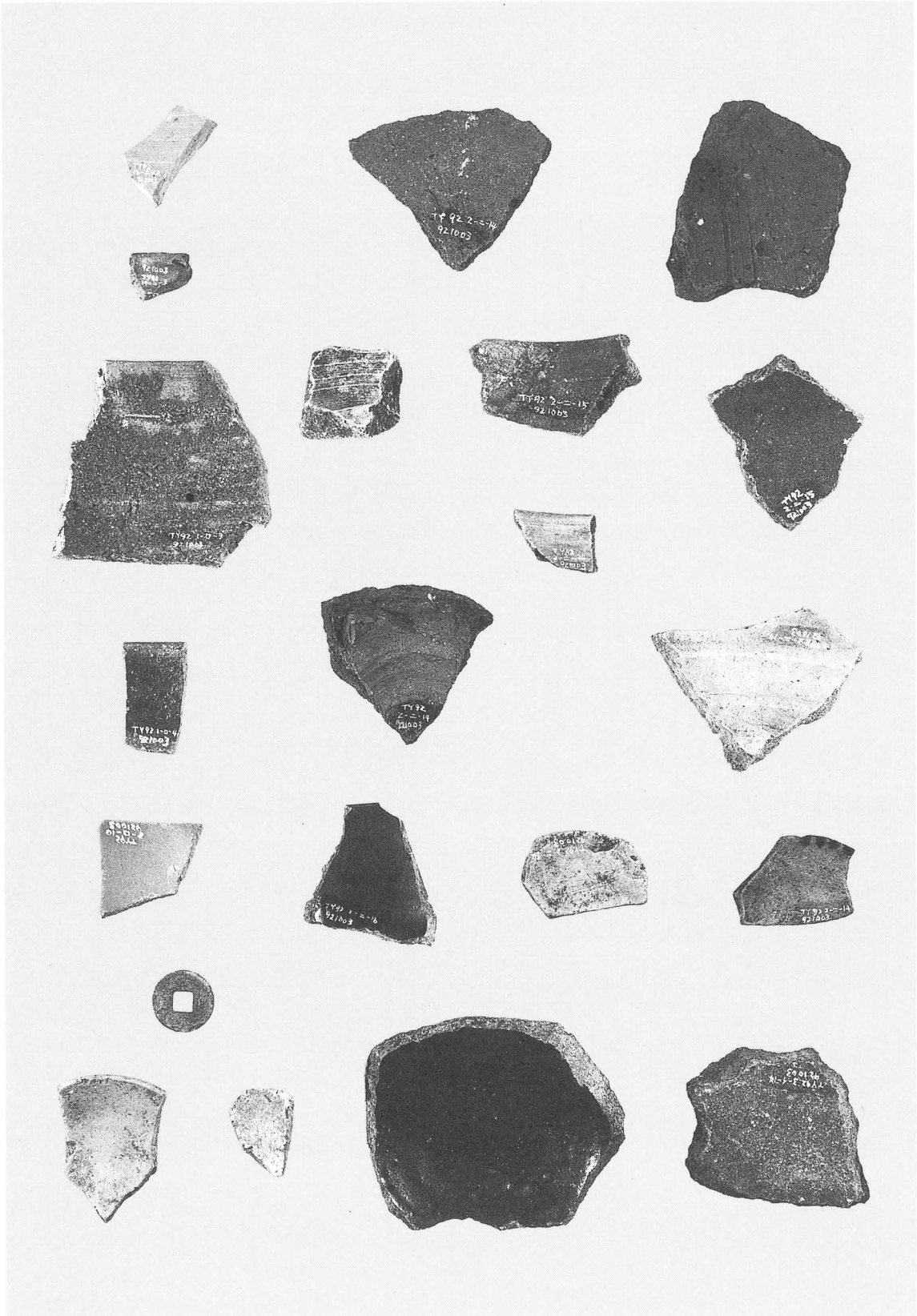


1・2下田Ⅰ遺跡，3・4下田Ⅱ遺跡，5～7岩峅寺遺跡，8～19宮路遺跡，20新宮山城址，
21～30東中野新Ⅰ遺跡，31・32東中野新Ⅱ遺跡

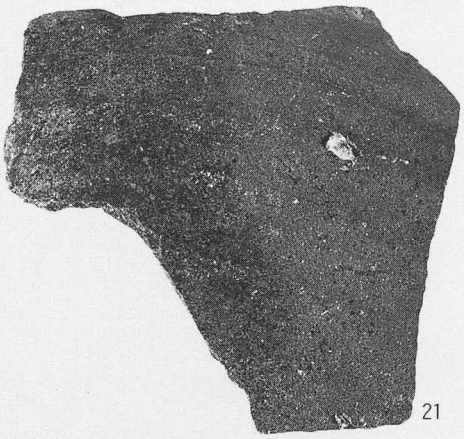


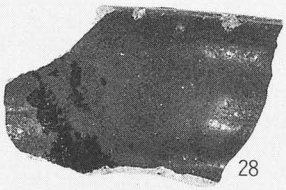
33～35横江Ⅰ遺跡，36～38横江Ⅱ遺跡，39・40横江中野林遺跡，41～51遺跡範囲外採集品


1
2
9
8
3
10
14
15
16
4
11
17
5
12
18
19
7
6
20
13
27

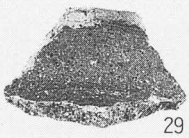


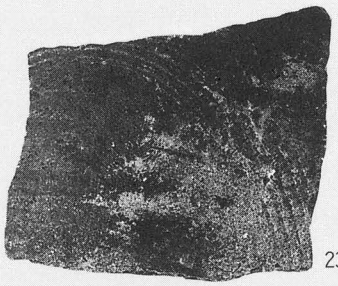
図版五遺物裏面

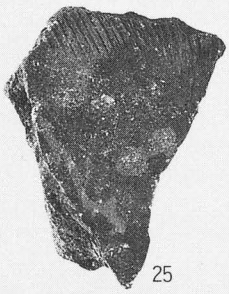

21

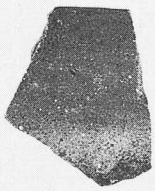

28

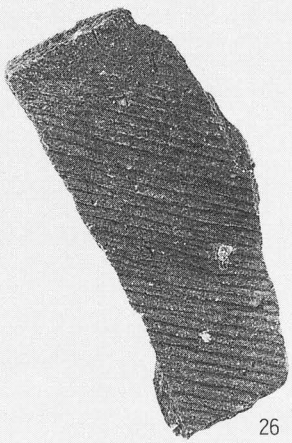
22

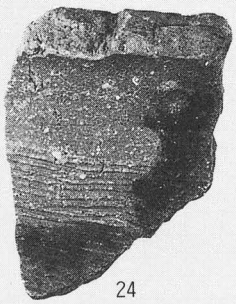

29

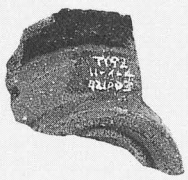

23

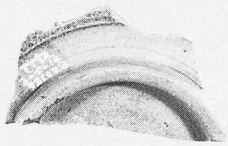

25

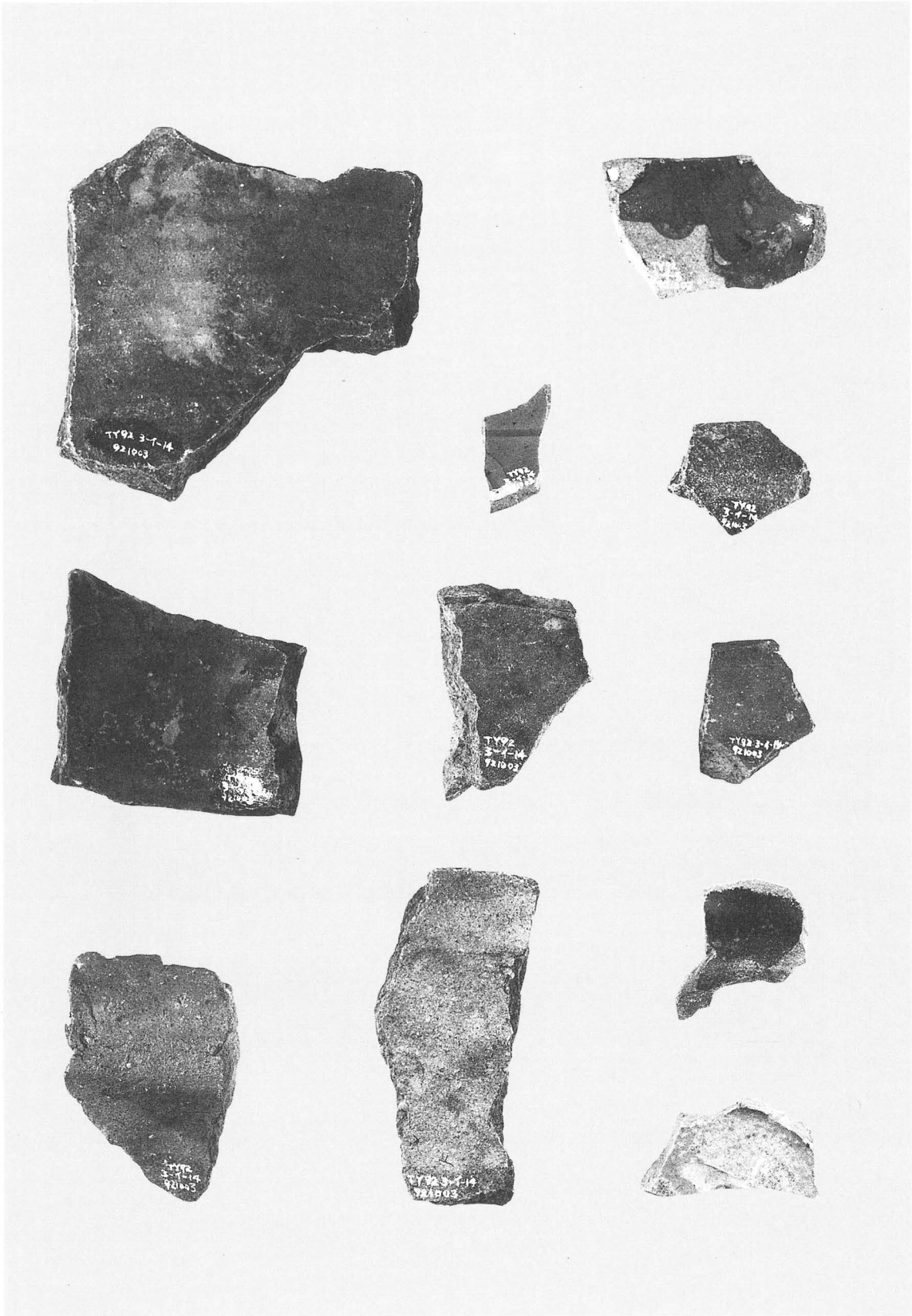

30


26

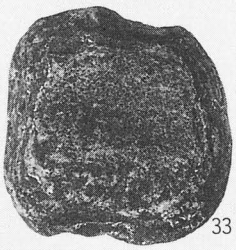

24

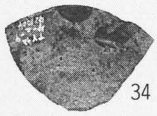

31

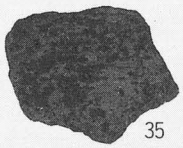

32

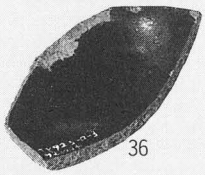


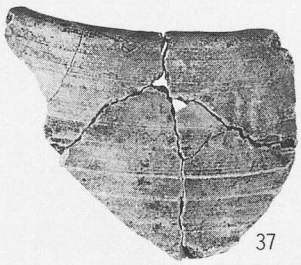
図版七遺物裏面

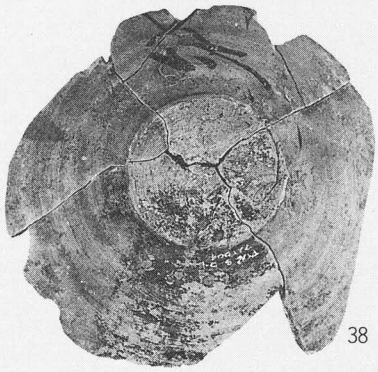

33

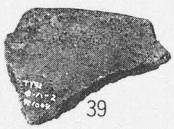

34

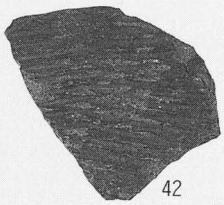

35

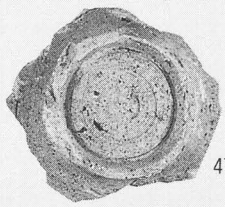

36


37


38

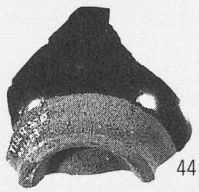

39

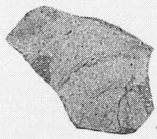

42

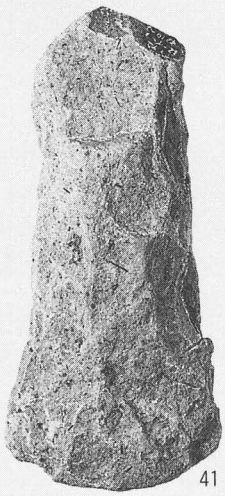

47

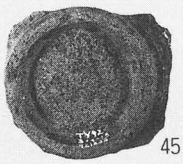
40

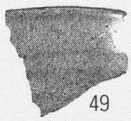
43

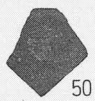

44

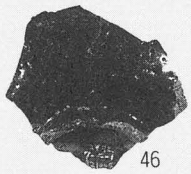

48


41

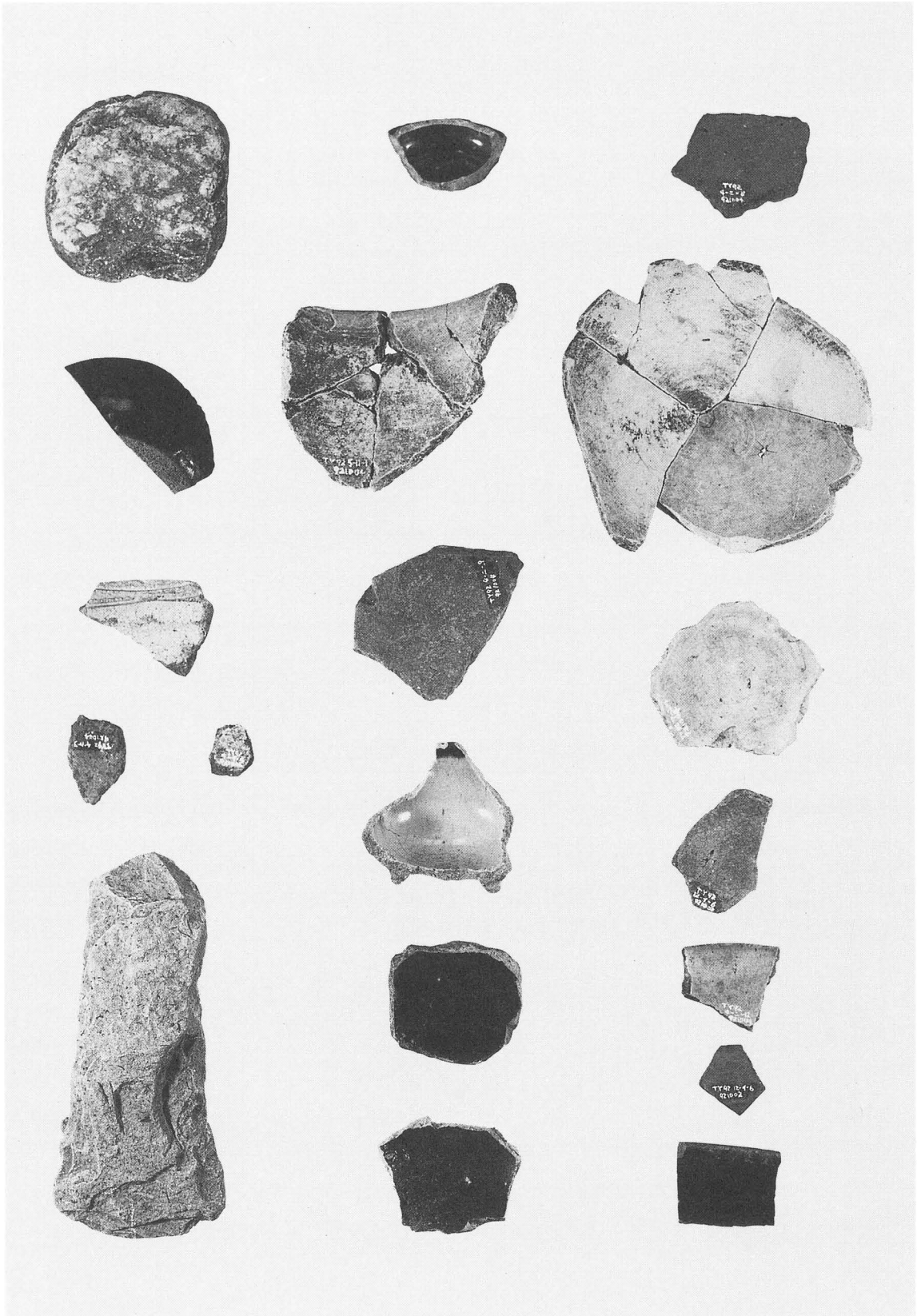

45


49


50

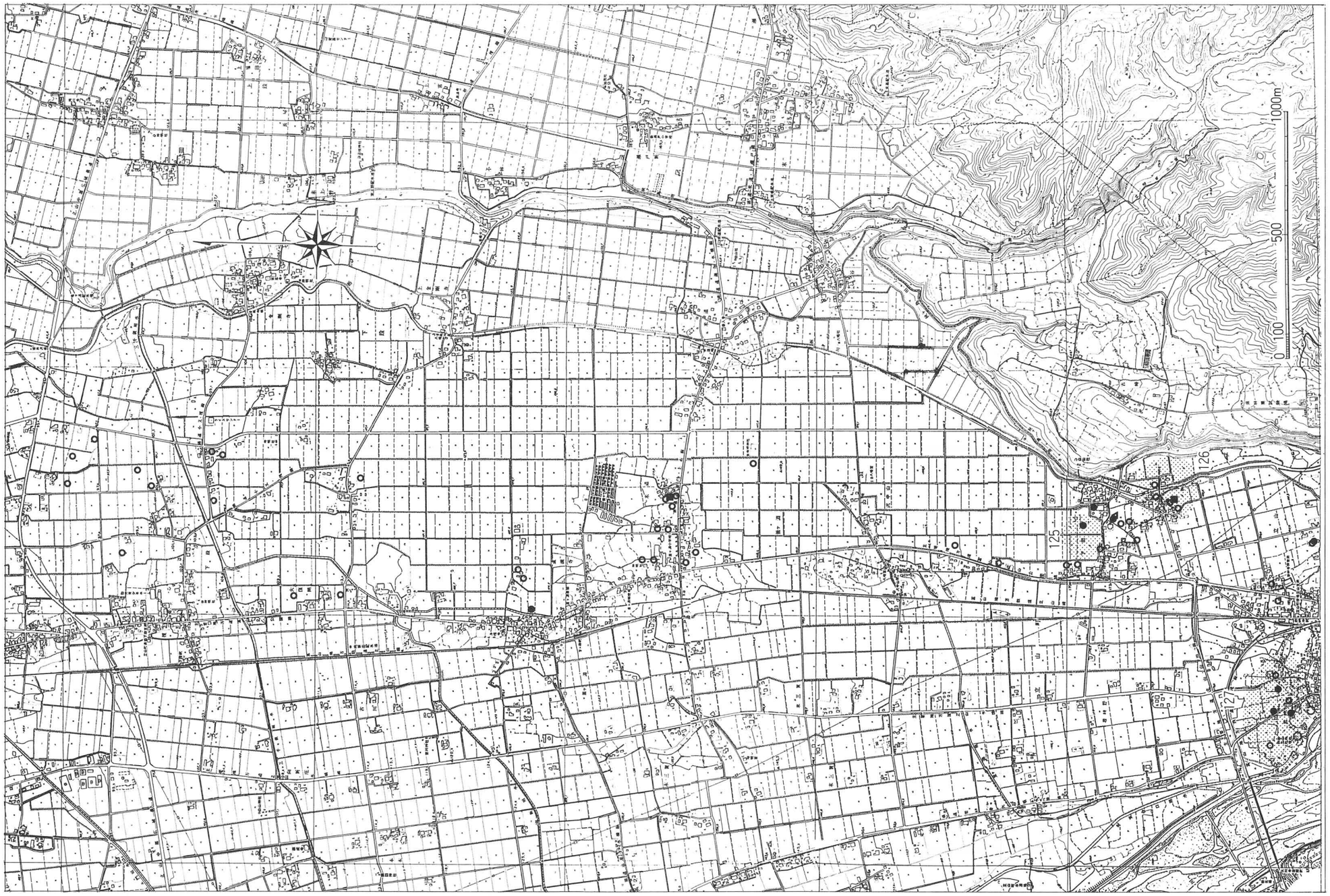

46

51



図版九遺物裏面

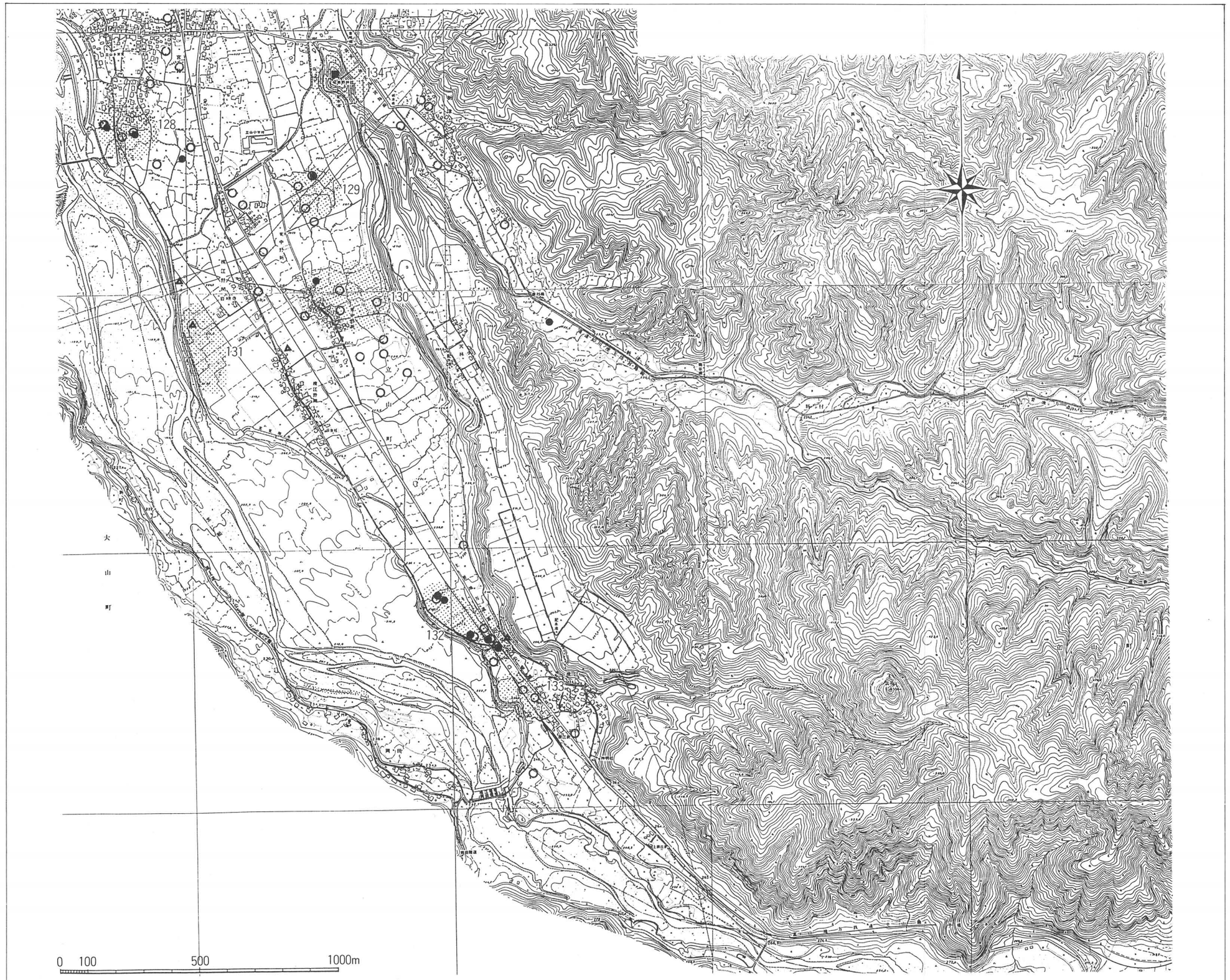
△：縄文時代遺物採集地点
■：古代遺物採集地点
●：中世遺物採集地点
○：近世遺物採集地地点
125 下田Ⅰ遺跡（中世～近世）
126 下田Ⅱ遺跡（縄文・近世）
127 岩峅寺遺跡（中世～近世）



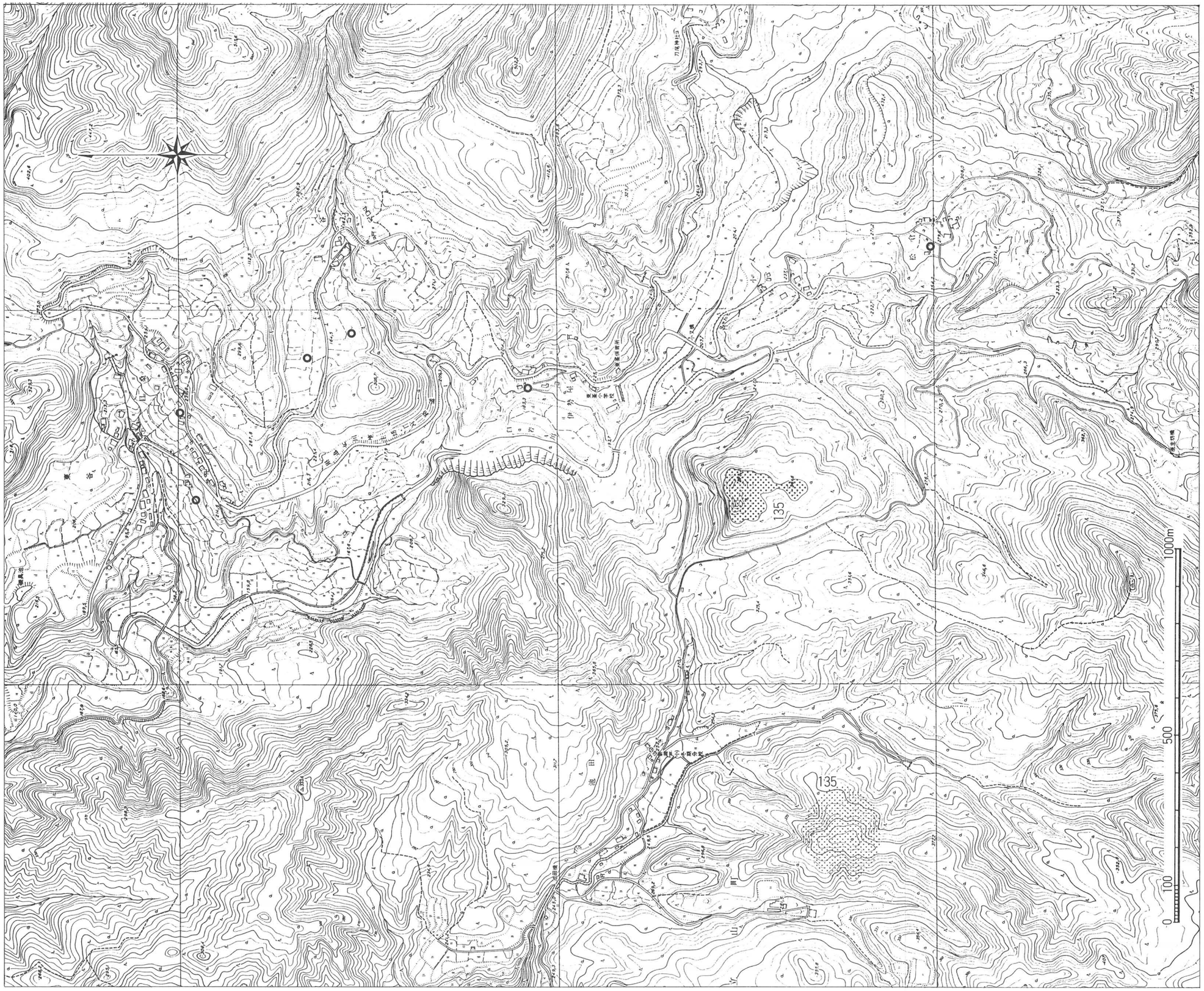
図版一一　Ⅷ地区の遺跡と遺物採集地点Ⅰ

図版一二　Ⅷ地区の遺跡と遺物採集地点Ⅱ

△：縄文時代遺物採集地点
■：古代遺物採集地点
●：中世遺物採集地点
○：近世遺物採集地点
128 宮路遺跡（中世～近世）
129 東中野新Ⅰ遺跡（中世～近世）
130 東中野新Ⅱ遺跡（中世～近世）
131 横江中野林遺跡（縄文後期）
132 横江Ⅰ遺跡（中世～近世）
133 横江Ⅱ遺跡（中世～近世）
134 新宮山城跡（中世）



△：縄文時代遺物採集地点
■：古代遺物採集地点
●：中世遺物採集地点
○：近世遺物採集地点
135 池田城跡（中世）



図版一三　Ⅷ地区の遺跡と遺物採集地点Ⅲ

1993年３月25日　印刷
1993年３月30日　発行

立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅷ

立山町文化財調査報告書第16冊

編集・発行　立山町教育委員会
富山大学人文学部考古学研究室
印刷　ヨシダ印刷株式会社